

『南山神学』39号（2016年3月）pp.225-281.

「神の母」

—エフェソス公会議（431年）の決議と調停への最初の試み—

ハンス ユーゲン・マルクス

ルカによる福音書に関するオリゲネスの第七講話六章と第八講話四章からも示唆されるように、イエス・キリストの母を「神の母」と称する慣行はおそらくエジプトから広がった。アレクサンドリアの司教テオナス（281/282-300 在職）のもとで当地の教理学校の学頭を務め¹、「小オリゲネス」²として知られていたピエリオスは『神の母について』³の論文を書いたが、次の司教ペトロス（311年殉教）のもとでオリゲネス思想の弾圧が以前に増して激しくなったため、論文は残存していない。1917年に発見された3世紀のギリシャ語パピルス写本はマリアへの最古祈祷の一つを伝えている。

「神の母よ、あなたの保護に寄りすがります。危急の際にわれらの懇願を退けないで、危険からわれらを救い出してください。あなたのみ純潔で、聖なる方です。」⁴

¹ EUSEBIUS, *Historia Ecclesiastica* VII 32, 26-30 (SC 41, 229-230).

² HIERONYMUS, *De viris illustribus* 76 (PL 23, 722C).

³ 情報は、断章と抜粋で知られているシデのフィリップスの『キリスト教史』による。これについては、C.DE BOOR, *Neue Fragmente des Papias, Hegesippus und Pierius in bisher unbekanntem Excerpten aus der Kirchengeschichte des Philippus Sidetes* (TU 5/2), Leipzig-Berlin 1888, 165-167 参照。

⁴ G. GIAMBERARDINI, "Il 'Sub tuum praesidium' e il titolo 'Theotokos' nella tradizione egiziana," *Mar* 31 (1969) 330; H. FÖRSTER, "Sub tuum praesidium," L. MARTNEZ/P.

アレクサンドリアの司教アレクサンドロスが同名のコンスタンティノポリスの司教に送った手紙から明らかなおり、当初、「神の母」という称号は特に仮現論に対して「イエス・キリストが見せかけにではなく、真実に神の母マリアから肉をとった」⁵、ということを強調するために用いられていた。後任アタナシオスはこれをアレイオス派にぶつけ⁶、ナジアンゾスのグレゴリオスは、仮現論に対する駁論にこだまして、この称号の承認を正統信仰の試金石として掲げた。

「乙女マリアが神の母であることを告白しなければ、誰でも神から遠く離れていると思われる。キリストが神的にして人間的な仕方で形づけられず、水が管を通るように、乙女を通過した、と主張する者も神を欠いている。キリストが神的な仕方で形づけられたのは、男性なしに受胎されたからであり、人間的な仕方で形づけられたのは、自然の法則にしたがって、胎内で成長したからである。」⁷

グレゴリオスがこの文書を書いた数十年後、「神の母」という称号の妥当性をめぐって、412年以來アレクサンドリアの司教を務めていたキュリロスと428年4月10日に帝国首都コンスタンティノポリスの司教に就任したネストリオスの間に後者の就任後間もなく論争が起こった。

ここではまず、論争に先立つ各々の思想を概括したうえで、論争の開始経緯をみたい。次には、論争に決着を付けるために開かれたエフェソス公会議の開

GUIDACCIO (edd.), *Fontes, Documenti fondamentali di storia della Chiesa*, Cinisello Balsamo 2005, 67-69.

⁵ Epistola ad Alexandrum Constantinopolitanum 12 (PG 18, 568C).

⁶ De incarnatione Dei Verbi et contra Arianos 8 (PG 26, 996A).

⁷ GREGORIUS Naz., Epistola 101, ad Cledonium presbyterum (PG 37, 177C-180A).

会経緯と決議内容を確認したい。最後に2世紀以上も続いた対立の調停への最初の試みに注目したい⁸。

1. 論争前の主要当事者の思想

共通の前提は、天地創造の前から神と共にあり、神であった「言」（ヨハ1：1-3 参照）がイエス・キリストの内に人間となった（ヨハ1：14 参照）、という信仰であった。アレクサンドリアを拠点にする神学者はこの信仰をストア学派のロゴス論にのっとって解釈していたので、人間イエスに固有の魂もしくは理性を必ずしも否定しなかったものの、神なる言を人間イエスのあらゆる理性的・精神的な活動の源とみなしていた。アレイオスがキリストの神性をめぐって引き起こした論争が進む中、アンティオケイアを拠点としていた神学者がその前提となっていたアレクサンドリア流のロゴス・肉体キリスト論にますます反発した。なぜなら、そこでは人間イエスが神の中に吸収されている一方、神が世界内在的な作用原理の次元に引き下ろされている、と考えていたからである⁹。

論争主要当事者の内、キュリロスはロゴス・肉体キリスト論の、ネストリオスはそれに対するロゴス・人間キリスト論の代表である。

1. 1. キュリロス

コンスタンティノポリス公会議（381年）まで、ローマ帝国三大都市を拠点とする教区の序列はローマ、アレクサンドリア、アンティオケイアであったが、同公会議によって、帝国首都移転を理由に「ローマの司教に次いで、コンスタン

⁸ カルケドン公会議以降論争決着までの展開について、拙論「まことの神、まことの人」『日本の神学』（第39号・2000年）20-42頁参照。より詳しくは、拙論「自立主体の発見——古代キリスト論の遺産」『南山神学』（第24号・2000年）77-114頁。

⁹ 拙論「『キリストの母』——ネストリオスの問題提起の文脈と真意」『南山神学』（34号・2011年）7-34頁参照。

ティノポリスの司教は名誉における首位権を持つべきである」¹⁰と、従前の序列が改正された。その結果、首都駐在の司教たちによる常設司教会議の影響が急速に増大し、とりわけ東方では各地域教会の執行部と対立していた者にとって控訴院となった。

401年アレクサンドリアの司教テオフィロスがニトリア砂漠の修道士たちをオリゲネス派として破門したとき、彼らは皇帝に控訴したため、慣例にしたがって、皇帝は帝国首都の司教ヨアンネス・クリュソストモス主催の常設司教会議に審査と裁決原案の作成を委任した。出頭を命じられたテオフィロスは甥キュリロスに伴われて、403年の秋カルケドン近くの別荘で数人の司教と共に会議を開き、出頭を拒否したクリュソストモスを弾劾した。別荘地にあった巨大な樅の木にちなんで「樅の木教会会議」と呼ばれる。9年後キュリロスは叔父の後を継いだ¹¹。

412年、司教に就任してまもなく¹²、キュリロスはアタナシオスの『アレイオス派駁論』第三巻を手本に『同一本質の聖なる三位一体についての宝』を、またそれを踏まえて『対話編』を著した¹³。さらに、420年の復活祭のために著した回状¹⁴とその頃ヨハネによる福音書について書いた注解書¹⁵も初期のキリスト論を知らせる資料である。

¹⁰ COD 32:16-19.

¹¹ 論争に先立つキュリロスのキリスト論については、J. LIÉBAERT, *La doctrine christologique de saint Cyrill d'Alexandrie avant la querelle nestorienne*, Lille 1951; L.I. SCIPIONI, *Nestorio e il concilio de Efeso*, Milano 1974, 110-133; A. GRILLMEIER, *Christ in Christian Tradition. I. From the Apostolic Age to Chalcedon (451)*, London/Oxford 1975, 414-421; 参照。

¹² N. CHARLIER, "Le 'Thesaurus de Trinitate' de saint Cyrille de Alexandrie. Questions de critique littéraire," *RHE* 45 (1950) 56; A. GRILLMEIER, *op. cit.* 415.

¹³ *Thesaurus de consubstantiale et sancta Trinitate* (PG 75, 9-656); *Dialogi de sancta Trinitate* (PG 75, 657-1124).

¹⁴ *Homilia* 8, 4-6 (PG 77, 565B-577A).

¹⁵ PG 73, 10A-1056A; 74: 10A-756C.

キュリロスは根本命題をアタナシオスから継承している¹⁶。「言は人の中に入ったのではなくて、人となったのである」¹⁷。師と同様にキュリロスも神とキリストとの関係を主題化しているが、この時期ではキリストにおいて「神であること」と「人であること」との関係をどう理解し表現したらよいか、というキリスト論特有の問題をまだ意識していない。当時の著作において、アポリナリオスをめぐって交わされた論争を知っていた痕跡もない¹⁸。二回だけキリストの魂に言及しているが¹⁹、アタナシオスと同様に、アレイオス派を相手どり、変化と受難を被ったのは、キリストの内に人となった神なる言自身ではなく、肉に加えてキリストの魂であった、と論ずるに至っていない。

実際に、変化や受難はもっぱら「肉」に関わる。それは聖性や栄光などの賜物の受領者でもある。もちろん「肉」について語る時、キュリロスは魂を抜きにした体のことを考えてはいない。体と魂からなる人間のことを考えている。だから「肉」の代わりに神なる言が「人」や「人間本性」を受け取った、と述べることもある²⁰。しかし、これはアポリナリオス以降の議論を反映した述べ方ではない²¹。アロイス・グリルマイアーが指摘するように、アタナシオスの場合と同様にキュリロスにとっても「人間本性」は「第一義的に人類で意味されているすべての事柄の総体を指している」²²。したがって、自らこの総体を内包する一方、神である、ということの関係について、初期のキュリロスはアタナシオスと同様に何の問題も感じていない。

¹⁶ アタナシオスについて、上掲拙論「ネストリオスの問題提起」13-15頁参照。

¹⁷ *Dialogi* 1 (PG 75, 681C); ATHANSIUS, *Contra Arianos* III, 30 (PG 26, 388A)。論争の最中皇帝テオドシオス 2 世の妹アルカディアとマリナに送られた書簡の中でこの命題が繰り返される。「神なる言は人の中に入ったのではなくて、神であり続けながら、真実に人となった」(De recta fide ad Dominas 31 (ACO I, 1, 5 p.73:1-2; PG 76, 1228C)。

¹⁸ J.LIÉBAERT, *op. cit.* 210-211.アポリナリオスについて上掲拙論「ネストリオスの問題提起」15-17頁参照。

¹⁹ *Homilia* VII, 6 (PG 77, 573B); *Glaphyra in Genesim* 6 (PG 69, 297C)。

²⁰ *Thesaurus* 15. 21 (PG 75, 281D, 361D)。

²¹ 反映していると主張する研究者もいる。特に LIÉBAERT, *op. cit.* 184-186 参照。

²² A. GRILLMEIER, *op. cit.* 416。

そういうわけで人間イエスの成長には関心がない²³。神なる言は「イエスの精神的な力であり、そして主 [イエス] の成長は神なる言の知恵の段階的な啓示意外に何も無い」²⁴。キュリロスの後代に絶大な影響を及ぼしたが、ネストリオスとの論争が勃発した頃、当時の神学水準に比べれば一世代遅れであった。ちなみに、428 年以降正統信仰の試金石とされる「神の母」はこの時期の著作には一回しか出ていない²⁵

1. 2. ネストリオス

クリュソストモスの弾劾・追放のため揺れていた教区内の安定を 406 年以來回復・保持していた帝国首都の司教アッティコスが 425 年 10 月 10 日に亡くなった。市民が二人の司祭プロクロスとフィリッポスとの間の後継争いに辟易し、426 年 2 月 28 日、彼らの歓声で貧者の保護者として人気の高い司祭シンニオスが司教になったが、翌年降誕祭前夜に亡くなった。再び騒乱が相次いだことを受けて、25 歳の皇帝テオドシオス 2 世と 414 年以來女帝の位についていた皇帝の姉プルケリアは地元の後任人事をあきらめて、かつてのヨアンネス・クリュソストモスのように、再びアンティオケイアから高名な説教者を首都司教座に招いた。アンティオケイア近郊のエウブレピオス修道院の院長ネストリオスであった²⁶

論争開始に先立つネストリオスの思想を知るため、イエスの誘惑に関する三つの説教²⁷、アダムの役割に関する説教の断章²⁸、降誕祭の説教断章²⁹、とヘブ

²³ LIÉBAERT, op. cit. 144.

²⁴ A. GRILLMEIER, op. cit. 415.

²⁵ In Isaiam IV, 4 (PG 70, 1036D); L.I. SCIPIONI, op. cit. 144.

²⁶ 論争に先立つキリスト論については、L.I. SCIPIONI, op. cit. 23-62 参照。

²⁷ F. NAU, *Le livre d' Héraclide de Damas*, Paris 1910, 338-358. 以下 LH とする。マリウス・メルカトルによる第一と第三説教のラテン語訳はエフェソス公会議資料の中に収められている (ACO I, 5, 62-64)。

²⁸ F. LOOFS, *Nestoriana. Die Fragmente des Nestorios*, Halle 1905, 347-350. 以下 Nestoriana とする。マリウス・メルカトルによるラテン語訳は ACO I, 5, p. 64-65 にある。

ライ人への手紙の注解が主要資料となる³⁰。それらを一貫するライトモチーフは第一のアダムと第二のアダムの対比であり、ネストリオスはその扱いをエイレナイオスから継承している³¹。

エイレナイオスと同様に³²、ネストリオスも人祖を形作った「神の両手」を子と聖霊と解する³³。人祖が「神の両手」によって神にかたどり、神に似せて作られたのは、すべてを支配するためであったが（創 1：26-27 参照）、その優れた地位を嫉妬していた悪魔に騙されて、人祖が神の似姿であることに満足せず、自らも神自身のようになることを望んだため、支配権と共に神との類似性をも失ってしまった。それらを回復するため、神の子は、第二のアダムとして第一のアダムの業をやり直すべく、自ら人間となった。その受胎と誕生は母マリアにこう告げられる。

『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる』[ルカ 1：28]。
 だから、あなたから生まれる『聖なる者は神の子と呼ばれる』[ルカ 1：35]。
 異邦人よ、布にくるまれた乳飲み子が飼い葉桶の中に寝かされたことを聞くとき [ルカ 2：7, 12 参照 5]、視える肉のためにつまずかないで、あの

²⁹ Nestoriana 322-328. マリウス・メルカトルによるラテン語訳は ACO I, 5, p. 60-62 にある。

³⁰ Nestoriana 230-242. 編集者は『ヘブライ人への手紙 3 章 1 節』という題で全文を一つの説教として位置づけているが、元来は二つの異なる文書群が後で一つにまとめられた (L.I. SCIPIONI, *op. cit.* 51)。一つは聖句の順に沿って聴衆の宗教心の向上を目指す説教 (Nestoriana 238:27-240:11) であり、もう一つは進行中の論争に対する各聖句を明確にするため、体系的な意図なしに、追加された諸短文 (Nestoriana 231:1-237:26; 240:11-242:21) である。おそらく、二番目の文書群はネストリオスの首都司教就任後、アンティオケイアでキリストの大祭司職を説いた説教の原稿に追加されたのだろう。

³¹ L.I. SCIPIONI, *op. cit.* 343; L.R. WICKHAM, "Nestorius/Nestorianischer Streit," TRE 24, 284:16-20.

³² *Adversus Haereses* IV, 20, 1 (SC 100, 626: 16-21); V, 1, 3 (SC 153, 26-28: 83-89).

³³ Nestoriana 262:7-12.

乳飲み子の尊厳を考えなさい。神性においては自分を産んだ母を造った方が、人間性においては母の胎内で形作られた。」³⁴

まさに人間として第一のアダムがやったことをやり直すため、第二のアダムも悪魔の誘惑に打ち勝つことによって第一のアダムの業をやり直した。その大前提は、キリストが人間となった神の子であることを悪魔が知らない、ということである。「神であることを知っていたならば、食べ物話をしたはずもない[マタ 4:3 参照]。しかし、人間を見ていたのだから、人間としてキリストに向かった」³⁵。あくまでも人間として誘惑に打ち勝つことによって、キリストは悪魔から人間に対する権限を奪い取る。「捕えようとしていた相手を逃げさせないため、主キリストは隠れている神をむき出しにせず、ただ人間として答える[マタ 4:4 参照]」³⁶。

悪魔からの権力剥奪に加えて神と人との仲介をし（一テモ 2:5 参照）、万物を神と和解させる（コロ 1:20 参照）こともキリストの重要な使命である。おそらく四旬節の初めあるいは主の公現祭に洗礼志願者の前で行われた説教でネストリオスはこう述べている。

「世界と神の仲介者が生まれる。蔑視されたエレミアあるいは他の預言者のようにではなく、与えようとしている神性を自身に結び合わせた者として。モーセがユダヤ人にとってそうであったように、ただ一つの民の仲介者ではなく、パウロが言っていると通りの仲介者である。『神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです』[一テモ 2:5]。見られ、現れる者としては人であり、神性と結びついた本

³⁴ Nestoriana 322:25-323:9.

³⁵ LH 340.

³⁶ LH 341.

性においては神である。我々の本性の益となるため悪魔に対する裁判を自ら負った仲介者なのである。」³⁷

これまで確認できた思想では三位一体の第二位である神の独り子がキリストの内に人となった、という信仰が大前提となっている。しかも、キリストが真実に神の独り子であることは悪魔への勝利に不可欠であった一方、真実に人であることが第一のアダムをやったことをやり直し、神と人を和解させるために絶対必要であった、という信仰もネストリオスにとって前提であった。この思想は救済論の次元に留まっており、キリストが「神であること」と「人であること」との一致はどう理解したらよいか、ましてや、どのような概念構成で適切に表現したらよいか、という厳密な意味におけるキリスト論までは進んでいない。この問題は初めてキュリロスとの衝突でネストリオスの認識範囲に入った。

ところが、その衝突の前触れはヘブライ人への手紙の注解にも見られる³⁸。ここで問題とされているのは、帝国軍に多く、それゆえ首都や宮廷にも影響力が強いゴート人の間に広がっていた独自のアレイオス・アポリナリオス流の単性論であった。その一番重要な特徴は、グノーシス主義にのっとり、キリストの内に人間となった神の子は、父なる神とは同一本質でもなく、また普通の人も同一本質ではなく、天上の世界から下ってきた下神・超人とみなすことであった³⁹。これに対してネストリオスは、救済を確信できるため、キリストの内に人となった神の子が父なる神と同一本質である一方、救われるべき人類とも同一本質であることを認めなければならぬ、と力説する。ここでも「神的本性」と「人間的本性」との区別と同様に、キリストにおける両性の一致も前

³⁷ Nestoriana 348:12-20.

³⁸ 上掲注 30 参照。

³⁹ L.I. SCIPIONI, *op. cit.* 59-61.

提となっているが、上述した意味におけるキリスト論の次元では考察の中心課題とはなっていない。

2. 公会議までの論争

428年4月10日にネストリオスはコンスタンティノポスの司教に就任した。キュリロスによれば、就任後まもなくネストリオスがマリアを「神の母」と称する慣行に反対したため、「世界規模の物議」⁴⁰が起きた。ネストリオスの罷免・排斥・流罪が決定的になった438年以降『教会史』を書いたソクラテスも、ネストリオスが「神の母」を「案山子のごとく嫌っていた」⁴¹と伝えているが、論争に先立つ説教の中で一回マリアを「神の母」と呼んだこともある⁴²。やはり論争開始の経緯は、キュリロスやソクラテスが伝えるより複雑であった。

2. 1. 開始

ソクラテスによれば、ネストリオスと一緒にアンティオケイアからコンスタンティノポリスにきた司祭アナスタシオスが「誰もマリアを神の母と呼んではならぬ。女性にすぎないから」⁴³、と説教壇から叫んだことで論争が始まった。ネストリオスの記憶は異なっている⁴⁴。それによれば、コンスタンティノポリスにきた時には、アンティオケイアでは一世代前に解決済みであった論争がなおも進行中であることに驚いた。マリアを「神の母」と呼んでいたグループは反対派からアポリナリオスの追随者として非難された一方、彼らはマリアを「人

⁴⁰ Epistola 1 ad Nestorium (ACO I, 1, 1, p. 24:23-25; PG 77, 41C. マリウス・メルカトルによるラテン語訳は ACO I, 2, p. 37:3-5 にある。

⁴¹ Historia Ecclesiastica VII, 32 (PG 67, 809C).

⁴² LH 347.

⁴³ Historia Ecclesiastica VII, 32 (PG 67, 808C-D).

⁴⁴ LH 91-92.

の母」と呼んでいた論敵をサモサタのパウロス⁴⁵とフォティノス⁴⁶の追随者として非難した。

面会の要請に応じて、ネストリオスは両派を司教館に招き、それぞれの主張を聞いたうえで、どちらも相手から決めつけられた異端を支持していないことが確認できた。そして聖書の中でキリストという称号が神であることと人であることの両方を指し示すので、余計な論争に終止符を打つため、ネストリオスはマリアを「キリストの母」と呼ぶことを提案した。両派は喜んでこの提案を受け入れ、「司教職を狙っていた者の畏にかかる日まで和解の内に留まった」⁴⁷。

ネストリオスは以上の記憶を流罪先のテーベ地方で449年頃書きとめた。「司教職を狙った」といわれるのが、ネストリオスの前に二回も候補に失敗し、434年以降446年の死亡まで首都司教を務めたプロクロスである。実際にネストリオスも参加していた典礼でプロクロスが説教し、もしもキリストと神なる言がそれぞれ別の方であるならば神が三位一体から四位一体に変わり、それがありえないので、マリアが「神の母」なのだ、と力説した⁴⁸。流罪先で書きまとめた記憶は基本的にエフェソスへの公会議召集後教皇ケレスティヌス1世に知らせた自分の姿勢と一致している。

「アポリナリオスとアレイオスの不敬虔にしたがって [神的本性と人間的] 本性の混合を告白しないかぎりでは『神の母』という言葉を用いたい人々に反対しない。また、天使からも福音の中でも発せられている称号であるがゆえに [ルカ2:11; また2:4参照], 『キリストの母』が『神の母』にとって変えられるべきだ、と特にこだわってはいない。…… しかし、一

⁴⁵ 上掲拙論「ネストリオスの問題提起」5-7頁参照。

⁴⁶ サモサタのパウロスに類似した思想で344年から351年の間に開かれた教会会議によって五回も異端とされた。

⁴⁷ LH 92.

⁴⁸ ACO I, 1, p. 106:21-23; 107:25-28; PG 65, 689A. 692A-B.

方において乙女をもつばら『神の母』, 他方においてもつばら『人の母』と宣言し, 他のすべての信徒を自らの告白に引きつけ, 賛同が得られない場合, 教会が分裂するぞ, と脅す時には, 誰かにこの論争の調停を委託しなければならない。そして調停者は両派を配慮して, 各々の主張に潜む危険を防ぐため, 福音の中で伝えられ, 神的本性と人間的本性のどちらをも指す表現に助けを求めるであろう。既述したとおり, 『キリストの母』は, 万物の主が単なる人間にすぎないというサモサタのパウロスの冒瀆を退けると共にアレイオスとアポリナリオスの意地悪さも防ぐ。⁴⁹

ほぼ同時に, 学友でアンティオケイアの司教になったばかりのヨアンネスに送った手紙の中でネストリオスは, 「あたかも独り子の神性が聖なる乙女から始まった, といったようなアレイオスとアポリナリオスの意味においてではなく, 天使が受胎を告げたその瞬間に行われた結合のゆえに, 乙女を敬虔に『神の母ないし出産者』と称することを望んでいた人々にそれを許した」⁵⁰と伝えた。この情報からも明らかなおとおり, ネストリオスの批判的は『神の母』という称号自体ではなく, アレイオスとアポリナリオスの流れをくんで, キリストを天上の世界から下ってきた下神・超人とみなす地元の単性論であった。おそらく称号の使用を直接批判していたアナスタシオスの説教に強いられて, ネストリオスは428年の降誕祭で自らの見解を詳しく解き明かす説教を行った⁵¹。

主題は「神と人との間の仲介者」(一テモ2:5; さらにロマ5:12-21参照)である。王が自分の破壊された彫像を気に病んでいるように, 神は墮罪のゆえに壊れた自分の似姿を気に病んでいたもので, 第一のアダムの場合と同様に男の種なしに乙女マリアから第二のアダムを形作った。マリアは神性を産んだので

⁴⁹ Nestoriana 181:17-182:9.

⁵⁰ Nestoriana 185:10-14.

⁵¹ Nestoriana 249-264. マリウス・メルカトルによるラテン語訳はACO I, 5, No 20-21, p. 29-32にある。以下についてはL.P. SCIPIONI, *op. cit.* 70-78参照。

はなく、神性の器具である人を産んだ。また、聖霊は神なる言を造ったのではなく、神なる言がその中に住むように、乙女から神殿を造った。さらには、神なる言自身が死んだどころか、自らがなったその人を復活させた。「迷い出た羊」のたとえ（マタ 18 : 10-14 参照）を手掛かりに、ネストリオスはこう訴える。

「神は墮落した [人間] 本性をご覧になり、あれほど砕かれた本性を [自己の] 尊厳の力で自己に引き寄せ、それをしっかり抱くため、それを立ち上げさせた。このたとえからの教訓を得よう。倒れた者を立ち上げさせようと思うなら、その体に身をかかめ倒れた者を引き起こす。このように相手に結ばれたにもかかわらず、あなたは、前にあったとおりの者であり続ける。このように受肉の神秘を考えて下さい。」⁵²

特にこの箇所のためネストリオスは養子論のレッテルを張られた⁵³。確かにキリストにおける神的本性と人間的本性との区別と一致の両方を考察すべきキリスト論の枠内では上の話は戸惑いを招くのだが、あくまでもネストリオスはアレイオスとアポリナリオスの流れをくんだ地元の単性論派に対して、人となった言も父なる神と同様に不変であることを説明しようとしている。倒れていた人間本性と神なる言の本性は異なっているものの、前者を引き起こすため後者に固執せず、自ら人間となった（フィリ 2 : 6-7 参照）。その人間の主体は神なる言であるのだが、人間的本性との一致を主題化する際に、その同一の主体を「キリスト」と称するのが適切である。なぜなら、この名称は「神なる言を引き下げないで両性を指し示す」からである⁵⁴。

「キリスト教徒に説教しなければならないのは、キリストが不変の神である

⁵² Nestoriana 253:4-10.

⁵³ L.P. SCIPIONI, op. cit. 72.

⁵⁴ Nestoriana 254: 10.

ことだけでなく、そうであったところの方であり続けながら、僕の身分になることによって善良でもある、ということである。こうしてあなたは知る。すなわち、キリストは結合の後に変わらなかったことだけでなく、御自身を善良と公平の方としてお示しになったことを。」⁵⁵

善良であるのは、キリストの内に神なる言が直接人類の救いに関わったからであり、公平であるのは、苦心して一人の人を通して人類の救いを獲得したからである。実際に神なる言が人を受け入れたのは、肉によって惹起された腐敗が肉によって解消されるためであった。もちろんキリストは単なる人ではない。人であり同様に神である。しかし、十字架にかけられて、死に、三日目に復活したのはあくまでも人であった。「神的權威に対する弁護者としてわたしは神性と共にこの人を礼拝する」⁵⁶。裏付けのため一連の聖書箇所を引用した後、ネストリオスは自分の見解をこうまとめる。

「着用している方のゆえに、衣服を尊ぶ。視えざる方のゆえに、視える方を尊ぶ。視える者によって神は決して分かれていない。それゆえ、分かれていない方の名誉を分けない。[二つの]本性を分けるものの、礼拝を一つにする。それ自身として神は母の胎内に形作られない。それ自身として神は聖霊によって造られない。それ自身として神は墓に葬られない。——そうであるならばわたしたちは人と死者の崇拜者であろう。——しかし、神が受け入れられている方の内におられる。受け入れている方と一緒にになっているのだから、受け入れている方のゆえに受け入れられている方も神と称される。それゆえ、霊たちは十字架に付けられた肉の名を畏れおののく [フィリ 2: 9-11 参照]。すなわち、十字架に付けられた肉と結合している

⁵⁵ Nestoriana 254:13-17.

⁵⁶ Nestoriana 260:6-7.

方を畏れる。神なのでその方自身が肉と共に苦しまなかったことを霊たちは承知している。全能の神性と結合しているから、目に視える方は審判者としてこられる。……したがって、主であり神を担った方の前に膝をかがめよう。神的権威と分かたれない似姿、隠れておられる神の映像として、この方を神なる言と共に神と呼ぼう。実際に結合のゆえに本性において二重である方は唯一である。」⁵⁷

以上の説教では「キリストの〔二つの〕本性がどのようにして一致しているか、どのようにしてキリストがただひとりであるか、という問題はネストリオスの関心事からほど遠く離れている。キリストがただひとりであること、キリストが常に同一行為者であること、現行の意味における唯一の主体であることはネストリオスの全論述の前提である」⁵⁸。論述的的地元の単性論派に対して神なる言の不変性を弁護することである。

ソクラテスが伝えるように説教への反発は激しかった。「主が人だけである、とネストリオスが主張し、コンスタンティノポリスの教会にサモサタのパウロスとフォティノスの異端を導入しようとしている、と多くの人々が思い込んでいた」⁵⁹。ソクラテスは、ネストリオスの公刊された文書を読んだうえで、そのような批判が当を得ていないと判断し、ただ不勉強と傲慢のためマリアを「神の母」と呼ぶ慣行に逆らったことが主要な誤りであった、と力説した⁶⁰。

「神の母」と同様に「受難した神」という表現も尊い伝統を誇っていた。しかし、コンスタンティノポリスでは一部の聖職者、そして特に410年頃から近郊の修道院で院長を務めていたエウテュケスの指導を仰いでいた多くの修道者の間にそれらが単性論的に理解され、活用されたので、ネストリオスは聖書やニ

⁵⁷ Nestoriana 262:12-16.263:3-16.

⁵⁸ L.P. SCIPIONI, op. cit. 78.

⁵⁹ Historia Ecclesiastica VII, 32 (PG 67, 809C).

⁶⁰ Ibid. 812B.

カイア信条にないような表現を避けるようにますます強く訴えた。そのためネストリオスはソクラテスの評価に見られる批判をまぬかれなかった。

サモサタのパウロスとフォティノスの名前こそ使わなかったものの、彼らと同様にネストリオスもキリストを二つに分割するという批判を最初に表明したのはプロクロスであった⁶¹。その影響を受けてのことであったか、448年ドリュライオンの司教になり、当時は修辞学教師・弁護士を務めていたエウセビオスは428年の終わりあるいは429年の初めに説教中のネストリオスを大声で異端と攻撃し⁶²、数日後、都内に回した小冊子でサモサタのパウロスとネストリオスの著作から抜粋した文書を並べて、こう締めくくった。

「世に先立って父から生まれた独り子と乙女マリアから生まれた方が同一の唯一の主イエス・キリストではなく、それぞれ別の方である、とあえて主張する者はだれであれ、排斥されよう。」⁶³

もちろん、ネストリオス自身そのような主張をしたことはない。ネストリオス自身のもろもろの発言が早くもあれほど曲解された背景には就任した直後皇帝に種々の異端派の弾圧を強いたことに加えて⁶⁴、数十年前のヨアンネス・クリュソストモスのように市民や聖職者の生活刷新を推進していたこともあった。劇、競技、踊りなどの快楽も抑えようとしたところで、女帝プルケリアの嫌悪を買った。しかし、エフェソス公会議までネストリオスは皇帝テオドシオス2世の支持を確信することができた⁶⁵。

⁶¹ 上記注 48 参照。

⁶² EVAGRIUS, *Historia Ecclesiastica* I, 9 (PG 86, 2445A). 時点について L.P. SCIPIONI, *op. cit.* 90 参照。

⁶³ ACO I, 1, 1, p. 102:21-23. マリウス・メルカトルによるラテン語訳は ACO I, 3, p. 20:1-3 にある。

⁶⁴ *Codex Theodosianus* XVI, V, 65.

⁶⁵ LH 89; L.P. SCIPIONI, *op. cit.* 31-32. 93.

2. 2. アレクサンドリアとローマの連携

首都に駐在していたアレクサンドリア教区の大使を通じてキュリロスは早くも論争について情報を得ていたに違いない。アレクサンドリアの司教は次年度の復活祭の日程を前年の秋あるいは遅くとも当年の初めには回状でエジプトとリビア各地の教会に告知するのが慣例であった。429年度の復活祭書簡でキュリロスは「神の母」という称号こそ使わなかったものの、マリアが産んだ子が神であることを力説した⁶⁶。さらに、復活祭の後、エジプトの修道士の問い合わせに答えて、キリストの内に神なる言が肉となった（ヨハ1：14参照）がゆえにマリアを「神の母」と称するのは何の差支えもない、と力説した。もちろん、マリアが産んだのは神なる言それ自体ではなく言がその胎内において自己と合一させた肉である。その合一は体と魂のそれに匹敵する。普通の人間の場合にも母が魂を産まないのに、全人間の母と呼ばれる。エジプトの修道士に宛てた書簡の中でキュリロスはネストリオスを名指しはしないで、キリストを人と神とに分割させる者を批判した⁶⁷。

アレクサンドリアの首都駐在大使はキュリロスにネストリオスが基本的にはエジプトの修道士に送った書簡の内容に同意していることを知らせたが、ちょうどその頃エジプトの四名の聖職者は、よくわからない理由でキュリロスを相手どって皇帝に裁判を求めており⁶⁸、慣例にしたがって、皇帝はネストリオス主催の常設司教会議に審査と裁決原案の作成を委任した。流罪先におけるネストリオスの記憶によれば、この件でアレクサンドリアの首都駐在大使に会ったとき、キュリロスを敵に回さず、友好関係を保持するよう忠告された。そこでネストリオスは「えこひいきによらない神との友好関係を優先させていただく」という旨の返事をし、それがキュリロスに伝えられた「時から、彼は和解不可

⁶⁶ PG 77, 773B-784B.

⁶⁷ ACO I/1/1, p.10:2-23:22.

⁶⁸ ACO I/1/1, p. 111:21-23.

能な敵であった」⁶⁹。首都駐在大使に送った手紙の中で自分を告発した四名が常に劣等な言行を繰り返してきたことを指摘したうえで、キュリロスは自分の戦略をこう暗示した。

「たとえ、より多くの名望もある人々が[ネストリオスに]その尊厳のためわたしを訴えたとしても、あの哀れな輩が、いくら教会法を引き合いに出しても、わたしの件で裁判官になるはずもない。法廷に出頭を命じられるなら、神に助けられて、彼こそ不敬虔に述べたことのため弁護を余儀なくされることで応戦しよう。」⁷⁰

ネストリオスを直接に攻撃できる機会をキュリロスに与えたのは教皇ケレスティヌス1世であった。418年教皇ゾシムスのペラギウス派弾劾文書への署名を拒否したためエクランムの司教ユリアヌスは司教職を罷免され、三名の仲間と共に帝国首都に渡り、皇帝と首都司教に復帰を要請した。そこでネストリオスは教皇に手紙を送り、ペラギウス派弾劾の理由について情報を要請し⁷¹、さらにマリアの適切な称号をめぐる自ら抱えている問題について情報を提供した⁷²。返事がなかったので、ネストリオスはもう一度教皇に手紙を送り、ユリアヌスらのしつこさのため対応を迫られていることを理由に情報提供を催促した⁷³。また、地元の論争についても触れながら、「私たちは最高にして混じりけない結合のゆえに独り子の唯一のプロソポンにおいて二つの本性を崇め

⁶⁹ LH 92.

⁷⁰ ACO I/1/1, p. 111:27-30. 「教会法」と訳した言葉は原文では意味不明であるし、マリウス・メルカトルはこれを自分の翻訳で無視している (PG 77, 75A-B)。ところが、古代のギリシャ諸都市同盟の名称に近いので、教父文献集の古典版を編集したサン・モール学派はこの言葉の意味を同盟の規約、すなわち当時の教会法、と解した (PG 77, 68A-B)。

⁷¹ ACO I, 2, p. 12:26-13:6.

⁷² ACO I, 2, p. 13:6-17.

⁷³ ACO I, 2, p. 14:6-8. 15-18.

る」⁷⁴と伝えた。この中でプロソポンは主体という意味なので「これはまぎれもなく当時のキリスト論が表現しえたことの内では最良である」⁷⁵。ところが、今回の手紙にも教皇は応えなかった。430年8月10日付のネストリオスを弾劾する書簡で、ラテン語への翻訳ができていなかった、と教皇は説明した⁷⁶。信じがたい説明ではあるが、それなりの根拠があったようである。

「実際に当時ローマ教皇庁は手紙を翻訳できるようなギリシャ語に熟練している事務員を持っていなかった。しかしこのことは驚きに値しない。東方でも状況はあまり異なっておらず、ラテン語に精通していた帝国役人は本当に例外であった」⁷⁷。

ところが、言語の問題以外にもう一つの問題が以降の経緯を左右することになった。ネストリオスに送った最初の書簡の中でキュリロスは教皇に情報提供を要請されたことを伝えている⁷⁸。以前からローマでは首都におけるペラギウス派の振る舞いが気になりであったろうし、旅行者や商人などの話でマリアの称号をめぐる論争が交わされていることも知られていたのだろう。429年の晩夏には、こうした情報がますます気になりとなったので、教皇がキュリロスに情報提供を要請した。おそらくこの要請には、暗黙の内に、首都司教の権限拡大に歯止めをかけよう、という申し出が含まれていた⁷⁹。ともかく、教皇の要請はキュリロスに全教会の利害を掲げて、首都教会に介入できる絶好の機会を与えた。ネストリオスに送った最初の書簡は介入の第一歩であった⁸⁰。

⁷⁴ ACO I, 2, p. 14:26-27.

⁷⁵ L.P. SCIPIONI, *op. cit.* 153.

⁷⁶ ACO I, 1, 1, p. 7:21-23.

⁷⁷ L.P. SCIPIONI, *op. cit.* 151.

⁷⁸ ACO I, 1, 1, p. 4:13-17; PG 77, 41A.

⁷⁹ L.P. SCIPIONI, *op. cit.* 153-154.

⁸⁰ ACO I, 1, 1, p. 23:25-25:4; PG 77, 40B-41D.

その書簡によればネストリオスの説教のおかげで多くの人はキリストを神性の道具とみなし、キリストが神を担う人だと考え、そのため「世界規模の物議」⁸¹が起きているとさえ言える。それらに歯止めをかけるため、ネストリオスは、真実に乙女マリアが「神の母」であることを告白することによって自分の誤りを認めなければならない。ネストリオスは簡潔な返信で、キリスト教徒が愛の掟にふさわしく互いに扱うべきことを想起させた⁸²。

これまでキュリロスはアタナシオスと偽バシレイオスの『エウノミオス駁論』第四・五巻に代表されるアレクサンドリアの正統なロゴス・肉体キリスト論をそのまま継承していたが、ネストリオスとの対決を開始したことをきっかけにアポリナリオス派偽造者は一連の偽書をキュリロスに回した。中には教皇ユリウス1世とフェリクス1世を著者名と掲げる偽書もあった⁸³。以来、キュリロスは「一つの本性」と「一つのヒュポスタシス」をキリスト論の中心に据えた。元来、本性もヒュポスタシスも「ものを成り立たせる実体」という意味だが、前者は実体の共通性、後者はその個別性に注意を喚起するのにより適している。だから両概念はキュリロスにとって同義語よりは相互補完的である。「しかしキュリロスが出発点とするヒュポスタシスの基本的な意味は実在する現実的な実体である」⁸⁴。

430年1月あるいは2月、キュリロスはネストリオスに第二の書簡を送った⁸⁵。キュリロスを告訴した者の中傷が始まることから推察できるように、書簡は首都常設司教会議における審理を中止しない限り、教理上の深刻な対決を覚悟せよ、とのネストリオスへの最後通牒として意図されている。ニカイア信条が

⁸¹ ACO I, 1, 1, p. 24:23-24; PG 77, 42B.

⁸² ACO I, 1, 1, p. 5.

⁸³ A. GRILLMEIER, op. cit. 473.476.

⁸⁴ Ibid. 481.

⁸⁵ ACO I, 1, 1, p. 25-28; COD 40:1-44:20. マリウス・メルカトルによるラテン語訳はACO I, 5, p.337-340にある。編訳/監修上智大学中世思想研究所『中世思想史原典集成3 後期ギリシャ教父・ビザンティン思想』（平凡社・1994年）103-107頁。

引用されたうえで、「言が肉となった」（ヨハ1：14），という意味が説明される。それは「言の本性が変化した」ということではなく、「言が理性的な魂に生かされた肉を，ヒュポスタシスによって，自分自身に合一させて，人間となった」ということである⁸⁶。世に先立って神から生まれ，神と共に存在しておられる言がマリアからもう一つの誕生を必要とした，ということではない。「私たちのため，また私たちの救いのために [自ら] のヒュポスタシスによって人間的な事柄を御自分に合一させ，女から出生された」⁸⁷ということである。そういうわけで神なる言が「自分の肉の誕生を甘受した」⁸⁸と言われる。

「もし，ヒュポスタシスによる合一があり得ないこと，あるいは不適当なこととしてそれを退けるなら，ふたりの子が語られることになる。その結果，必然的に，子と呼ばれ，子として敬われる人間と，それとは別の，本性上子としての名前と実質を有しておられる神の言とを区別しなければならない。それゆえひとりの主イエス・キリストをふたりの子に分割してはならない。」⁸⁹

キリスト教文献の中で「ヒュポスタシスによる合一」という表現はここに初めて出てくる。しかも，四回も繰り返される。以降，これは，キリスト論のキーワードの一つになるので，次第に獲得していった意味にしたがって「一個別者に即した合一」⁹⁰と訳してかまわない。しかし，ここでは「単に意志や恵みによる合一」⁹¹とは対照的に「合一の実在性」⁹²を強調するために用いられてい

⁸⁶ ACO I, 1, 1, p. 26:25-28; COD 41:22-30.

⁸⁷ ACO I, 1, 1, p. 27:10-11; COD 42:10-11.

⁸⁸ ACO I, 1, 1, p. 27:14; COD 42:19-20.

⁸⁹ ACO I, 1, 1, p. 28:7-11; COD 43:16-26.

⁹⁰ 上掲『中世思想史原典集成』106頁。

⁹¹ ACO I, 1, 1, p. 26:28-27:1; COD 41:31-32.

⁹² A. GRILLMEIER, op. cit. 487.

ることに留意しておきたい。ややあいまいな言い回しで、神的プロソポンと人間的プロソポンの合一も拒否されているが⁹³、その否定の含みは、モプスエスティアのテオドロス以来⁹⁴、神的プロソポンと人間的プロソポンとの結合を構想の中心に据えてきたアンティオケイア伝承を汲んできた者は分かっていたに違いない。すなわち、キリストが「神であること」と「人であること」との一致、結合を説明するためアンティオケイア伝承にこだわる限りでは、「神の母」の否定でネストリオスが引き起こした「世界規模の物議」は納まらない、ということである。キュリロスは再びニカイア公会議に焦点を合わせて、四回目には「ヒュポスタシスによる合一」を確認しながら、こう締めくくる。

「聖なる教父たちは聖なる乙女を神の母と呼ぶのをためらわなかった。むしろ、言の本性もしくはその神性が聖なる乙女からその存在の元を得たということではなく、理性的な魂に生かされた聖なる肉体が乙女から生まれたという意味でヒュポスタシスによって肉体と合一した〔神なる〕言が肉において生まれた。」⁹⁵

当時は本性とほぼ同様の意味を持っていたヒュポスタシスが個別者ないしは主体という意味を獲得するに至ったのは、キュリロスがネストリオスに挑んだ論戦を受けて以来、2世紀も続いた論争の結果である。その結果から見てキュリロスの概念構成の明瞭さがよく称賛されてきた⁹⁶。しかし、当時の状況ではネストリオスにキュリロスから送られてきた第二の書簡は、ネストリオスにアポリナリオス流の下神・超人の単一本性宣言に映ったに違いない。結局、「意

⁹³ ACO I, 1, 1, p. 27:1; 28:12; COD 41:32-33; 43:28-29.

⁹⁴ 上掲拙論「ネストリオスの問題提起」23-29頁参照。

⁹⁵ ACO I, 1, 1, p. 28:18-22; COD 44:1-10.

⁹⁶ A. GRILLMEIER, op. cit. 482.

図的な武力行為であったと判断されるべきであろう」⁹⁷。

430年6月、ネストリオスは長文の書簡で今回の論戦に応えた⁹⁸。その中で「ヒュポスタシスによる合一」という新しい表現については特に違和感を表明していない。むしろ、その容認を前提に、キュリロスが神性と人性との区別と共に両性の「一つのプロソポンへの結合」を適切に表現したことを称賛している⁹⁹。ネストリオスはプロソポンを主体という意味で活用しているが、キュリロスもヒュポスタシスを同様に理解しているなら新しい表現を容認できる、と示唆しているのだろう。両性の「合一」(henosis)に代わって、ネストリオスはそれらの「結合」(synapheia)について語る。すでに430年の春、キュリロスはこれを身近な並列もしくは相互関与しか認めないあいまいな表現として批判したが¹⁰⁰、同年の秋、ネストリオスに宛てた第三の書簡でその使用をきっぱり退けた¹⁰¹。当時のキリスト教文献の中でもこれが性交を指すこともあるので¹⁰²、ネストリオスはよほど密接な結合を考えていたに違いない。

ネストリオスによればキュリロスは深刻な矛盾を抱え込んでいる。すなわち、「神なる言は女からの第二の誕生を必要としなかったこと」、さらに、「神性が苦しみにも服しないこと」を明快に宣言する一方で¹⁰³、宣言の趣旨にも反して、キリストの誕生や死など、人性のみに関わる論述の際にも「神なる言」を主語として想定している。これは、ネストリオスが種々の角度から進めている批判の要である。立脚点はニカイア信条である。そこで父なる神と同一本質の独り子にかかわる永遠の事柄が述べられていることを踏まえて、独り子が人となっ

⁹⁷ L.P. SCIPIONI, op. cit. 110.

⁹⁸ ACO I, 1, 1, p. 29-32; COD 44:21-50:29. ルスティクスによるラテン語訳はACO I, 3, p. 23-26にある。翻訳については上掲『中世思想史原典集成』89-94頁参照。

⁹⁹ ACO I, 1, 1, p. 30:18-20; COD 46:39-42.

¹⁰⁰ Adversus Nestorii blasphemias contradictionem 2, 5.8 (PG 76, 44C.50E).

¹⁰¹ ACO I, 1, 1, p. 36:19-20; COD 52:32-34.

¹⁰² DIODORUS, Fragmenta in Genesim (PG 33, 1569D); EPIPHANIUS, Adversus LXXX haereses 21, 2 (PG 41, 288B); PROCLUS, Oratio 6, 7 (PG 65, 732D).

¹⁰³ ACO I, 1, 1, p. 36:20-21; COD 46:42-47:1.

てキリストの内に成し遂げた救いの営みがまとめられている。同様にキュリロスも永遠の事柄と時間の内に成し遂げられた救いの営みのそれぞれに適した表現を使用しなければならない、とネストリオスは力説する。そしてキリストが両方の事柄を現わす名称として聖書（特にフィリ 2 : 6-11 参照）とニカイア信条の中で用いられているので、キリストの肉体を産んだマリアは「神の母の代わりに、キリストの母と称されるのがより適切であろう」¹⁰⁴。

キリストの肉体は神の「気高く神的な結合によって子と一つにされた神殿であり、その結果、神的本性が神殿を御自分のものとされた」¹⁰⁵。しかし、その取得を理由に、人間に固有の事柄までも神性に帰すことは「アポリナリオスやアレリオスや他の異端者たち、否、むしろ彼らよりもずっと邪悪な者たちの病んだ思いによって欺かれることにほかならない」¹⁰⁶。

最後に帝国政府の指導力で首都の教会がどんどん成長していくことを指摘したうえで、ネストリオスは次の聖書箇所を引用することで、はなはだ軽率にもアレクサンドリアの司教に対する首都司教の優位を示唆する。「ダビデの家はますます勢力を増し、サウルの家は次第に衰えていった」（サム下 3 : 1）¹⁰⁷。

430 年の春、キュリロスは長文の駁論を著し、ネストリオスは神なる言とキリストとの間には「互いの関与による結合」しか認めないので、キリストは神を担う人だと考えているはずだ、という主張を繰り返す。むろん、人性と神性は無限に異なっているが、両性の合一の後になおも区別について語ることは、二人の子について語ることになる¹⁰⁸。

おそらくその頃、皇帝テオドシオス 2 世¹⁰⁹、その配偶者エウドキアと姉の女

¹⁰⁴ ACO I, 1, 1, p. 31:2-3; COD 47:35-36.

¹⁰⁴ ACO I, 1, 1, p. 31:25-27; COD 46:42-47:1.

¹⁰⁵ ACO I, 1, 1, p. 31:25-27; COD 48:43-49:4.

¹⁰⁶ ACO I, 1, 1, p.31:30-31; COD 49:5-12.

¹⁰⁷ ACO I, 1, 1, p.32:17-18; COD 50:15-17.

¹⁰⁸ *Adversus Nestorii blasphemias contradictionem* (PG 76, 9-248).

¹⁰⁹ *De recta fide ad Theodosium* (ACO I, 1, 1, p. 42-72; PG 76, 1133-1200).

帝プルケリア¹¹⁰、さらには、皇帝・女帝二人共の妹アルカディアとマリナ¹¹¹にもそれぞれ長文の書簡を送った。皇帝への書簡の第一部は従来の異端説を紹介し、第二部はキリストにおける二つの本性を論ずると共にキュリロス自身の見解をまとめる。ここではネストリオスは出てこない。他の二書簡はネストリオスを名指しで相手取り、同様の礼拝と主権によるキリストと神の子の結合しか認めないことへの批判を繰り返す。しかも、この批判を裏付けるため、ネストリオス自身の「唯一のプロソポンにおける結合」が複数の「プロソパにおける結合」に変えられている¹¹²。

ケレスティヌス1世に送った書簡の中でキュリロスは一層露骨に実態を歪曲する¹¹³。ネストリオス自身が公の席で「神の母」を否定しなかったものの、その主催で行われた典礼で、友人であり司教を務めるドロテオスが乙女マリアを「神の母」と称する信徒の排斥を告げて以来地域教会の分裂が深まる一方だったので、ネストリオスに回心を促すため自らが二回も手紙を送った。しかし、回心の兆しがないので、キュリロスは教皇に文書での見解表明を求めた。

教皇の判断を容易にするため、キュリロスはネストリオスの説教などの著作から抜粋された箇所の名句集を用意し、ローマに遣わされたアレクサンドリア教区の執事ポセイドニオスに持参させた。先方での交渉のため彼にキュリロスから渡された覚書ではネストリオスの異端がこうまとめられている¹¹⁴。神なる言は、マリアから生まれるはずの子が聖人になることを予知したため、その子を男の関与なしに生まれさせ、自己の呼称で呼ばれる恵みを彼に与えた。神なる言が受肉したと言われるのは、それが常にマリアから生まれた聖人と共にいたからである。すなわち、預言者と共にいたように神の言がこの人と共にいた

¹¹⁰ De recta fide ad Augustas (ACO I, 1, 5, p. 26-61; PG 76, 1336-1420).

¹¹¹ De recta fide ad Dominas (ACO I, 1, 5, p. 62-118; PG 76, 1201-1336).

¹¹² L.P. SCIPIONI, op. cit. 144-145.

¹¹³ ACO I, 1, 5, p. 10:13-12:24; PG 77, 80B-85B.

¹¹⁴ PG 77, 85C-89A.

から、ネストリオスは神の独り子とキリストとの「合一」ではなく「結合」しか認めない。自らの不信心を隠蔽するため、胎内の時から神の独り子がキリストと共にいた、とネストリオスは言う。しかし、神の子であったと言わず、神の好意のゆえにそう称せられた、と言っている。われわれのように神の子が死に、復活した、と言わない。人が復活した、と言っている。われわれも神なる言が不死であり、まさに命であることを信じている。しかし理性的な魂に生かされた肉をご自分に合一させたので、肉において苦しみを受けたこと、また、肉において復活したことを信じている。

この覚書からも推察できるように、ポセイドニオスがローマに持参していった書類はネストリオスの見解について正確な情報を提供するためというよりは、その弾劾を確保するためにまとめられた。当時は教皇庁の執事を務め、後で教皇になったレオはマルセイユ付近に修道院を創設したカッシアヌスに書類の審査を要請した。黒海西岸の出身で、長年、東方で活動していたため、有識者と評価されていたのだろうが、審査結果はあまりにも雑で、西方キリスト教の世界で決着するようになった「ネストリオス主義」のレッテル形成に大きく貢献した¹¹⁵。

十数年前にマルセイユで開かれた教会会議で修道士レポリウスが属性の交用を否定したため破門された経緯にカッシアヌスもかかわっていた¹¹⁶。やはり、属性の交用に関するネストリオスの見解がレポリウスのそれによく似ていたので、カッシアヌスはネストリオスの著作から抜粋された書類を注意深くは読まず、レポリウスと同じ誤りとしてネストリオスのそれをこうまとめた。

「イエスは単なる人間として生まれた。後で、神的な名誉や神的な主権に至

¹¹⁵ De Incarnatione Domini contra Nestorium Libri VII (CSEL 17, 235-391).

¹¹⁶ 弾劾を受けてレポリウスはアフリカに渡り、アウグスティヌスに説得されて418年に自説を撤回した (LEPORIUS, *Libellus emendationis* [CChr.SL 64, 94-123])。これについては、A. GRILLMEIER, *op. cit.* 464-467、拙論「『一つにして同じ方』——古代キリスト論に対するラテン教父の貢献——」『南山神学』(第32号・2009年) 58-59頁参照。

ったのは、神的な本性のためではなく、人間としての功績のためである。こうして固有性としてご自分と一致していた神性のゆえに常に神性を持っていたのではなく、それを後で働きや受難の報いとして勝ち取った。言いかえれば、私たちの主と救済者は神として生まれたのではなく、神から受け入れられた、という冒瀆をネストリオスは繰り返しているのである。」¹¹⁷

これは、「ネストリオス主義」のレッテルに加えて、カロリング朝以来ネストリオスの名前と結びついている「養子論」の所以でもある¹¹⁸。もちろん、これもネストリオス自身のキリスト論とは全く無縁の話である。しかしここに留まらず、ペラギウスの誤りこそネストリオスのそのの生みの親だ、とまでもカッシアヌスは異端狩を広げる。

「単なる人間イエス・キリストが罪の汚れなしに進んだ、とペラギウス派が主張したのは、望みさえすれば、すべての人が罪なしに進むことができる、と主張し得るためであった。」¹¹⁹

以上の審査報告をうけてケレスティヌス1世は教会会議を開いた。ネストリオスに弾劾判決を告げる書簡と関連資料の日付は430年8月10日である¹²⁰。ネストリオスに宛てた書簡で、その就任を歓迎したことを先方に想起させたうえで、その見解を知らされた今その歓迎を後悔していることを知らせる。キュリロスの二書簡に続いて、今回の書簡は先方に誤りの訂正を促す三回目の試みな

¹¹⁷ De Incarnatione Domini contra Nestorium I, 2, 5 (CSEL 17, 239:5-12).

¹¹⁸ 拙論「『死者の中から最初に生まれた方』カロリング朝時代における養子論争開始の経緯」『南山神学』（第33号・2010年）135-163頁、「『死者の中から最初に生まれた方』カロリング朝時代における養子論争の展開」『南山神学』（第37号・2014年）1-27頁、「『死者の中から最初に生まれた方』カロリング朝時代における養子論争の終息」『南山神学』（第38号・2015年）1-47頁参照。

¹¹⁹ De Incarnatione Domini contra Nestorium I,3,15 (CSEL 17, 239:25-28).

¹²⁰ ACO I, 2, p. 7-12; ACO I, 1, p.77-83.

ので、今回も「悪く言われたことが正されなければ、すべての司教同僚とキリスト教徒との交わりから自分自身を直接に締め出すことになる」¹²¹、と教皇は帝国首都の司教に告げている。

誤りの性質と同様に要請される訂正の内容や手続きについても教皇の指示はかなりあいまいである。カッシアヌスの邪推に反して、ネストリオスが原罪についてペラギウス派に賛同していないことを認めたとうえで、教皇はネストリオスに次の判決を告げる。自らもローマとアレクサンドリアと一致することを望むなら、ネストリオスはキュリロスから戒められたとおりに信じなければならず、教皇書簡の受領後十日以内に「聖書が一つにする事柄を取って分割する、この不信実な新考案」を文面で否認しなければ、「普遍のカトリック教会の共同体から退けられることを知るべきである」¹²²、と。

コンスタンティノポリスの聖職者と信徒に宛てた書簡¹²³で、教皇はネストリオスから自分に送られた「本人署名付きの書簡」、並びにキュリロスから送られた書類に基づいて、かつてサモサタのパウロスが引き起こした邪悪な議論を最近ネストリオスが再び繰り広げていることを自らが確認できた、と伝えたうえで、こう告げた。「海や陸の距離で長引くことを契機にあの病が右往左往しないようにわが兄弟キュリロスに代行を委任した」¹²⁴。キュリロスに宛てた書簡は、教皇の「判決をローマ聖座の權威を帯びて、わたしの代行として厳正に実行する」ことを要請している¹²⁵。アンティオケイアの司教ヨアンネスにネストリオスに対する判決を伝える書簡も残っている¹²⁶。

430年11月上旬、アレクサンドリアで開かれた教会会議でキュリロスがネストリオスに宛てた第三の書簡とその要点をまとめる十二破門条項が承認さ

¹²¹ ACO I, 2, p. 9:20-22.

¹²² ACO I, 2, p. 12:10-11.

¹²³ ACO I, 2, p. 15-20; ACO I, 1, 1, p.83-89.

¹²⁴ ACO I, 2, p. 20:19-20.

¹²⁵ ACO I, 2, p. 6:21-22.

¹²⁶ ACO I, 2, p. 21:1-22:20; ACO I, 1, 1, p. 90:7-91:33.

れた¹²⁷。書簡の冒頭にキュリロスは東西教会を揺さぶっている物議の発生に対するネストリオスの責任とケレスティヌス1世の主権でローマに、自分の主催でアレクサンドリアに開かれた教会会議との一致を強調する。引き続きニカイア信条とアレイオスに対する破門条項の引用を経て、神なる言が肉となった意味を「聖なる乙女の母胎から肉をご自分のものとして造られ、私たちと同じ誕生を耐え忍ばれ、人間として女から出生された」¹²⁸と、前回の書簡とほぼ同じ表現で説く。

キュリロスが「ヒュポスタシスによる合一」にこだわるのは、「名誉と主権は[二つの]本性を合一し得ない」からである。実際に「どちらも使徒と聖なる弟子であったので、ペトロとヨハネも名誉において平等であったものの、一人ではなく、二人であった」¹²⁹。だからキュリロスはネストリオスの説教から数箇所を引用しながら、共通の礼拝や神という呼称における一致を特に厳しく弾劾する。

「キリストについてわたしたちは次の語り方を退ける。『受け入れている方のゆえに受け入れられている方を尊ぶ。見えざる方のゆえに見える方を拝む。』次のように言うのは一層恐ろしい。『受け取った方と共に受け取られた方も神と称される。』このことを言う人はまたも唯一であるキリストを二つに分ける。一方では自分自身としては人間である方を、他方では自分自身としては神である方として置く。合一を否定していることは自明である。合一を認めるなら、一方は他方と共に礼拝され、神と称されるのではなく、[神の]の独り子であるキリスト・イエスは唯一の方であり、ご自分の肉と

¹²⁷ ACO I, 1, 1, p. 33-42; COD 50:30-61:22. ディオニシウス・エクスグウスによるラテン語訳は ACO I, 4 p. 236-244 にある。翻訳については上掲『中世思想史原典集成』108-120 頁参照。

¹²⁸ ACO I, 1, 1, p. 35:17-19; COD 51:5-9.

¹²⁹ ACO I, 1, 1, p. 36:14-16; COD 52:21-25.

共に唯一の礼拝で崇められる、ということである。」¹³⁰

こうした「ヒュポスタシスによる合一」のため属性の交用も認められなければならない。実際に人間は靈魂と身体から成り立っているのに「二重のものとは考えられず、双方から成る一つのものと考えられる」¹³¹。それと同じように福音書の中で伝えられているキリストの発言も人間としての発言と神としての発言に分けられるべきではない。「福音書の中のすべての発言は肉となった言の唯一のヒュポスタシスに帰されなければならない」¹³²。書簡の終わりに「聖なる乙女がヒュポスタシスによって肉と合一された神を肉体的に産んだという意味において、この方が神の母である」¹³³、と告げられる。

以上の内容は簡潔に十二破門条項にまとめられた。特に第四条は注目に値しよう。福音書や使徒の書簡の中でキリストについて言われていることをそれぞれ二つのプロソポンないしはヒュポスタシスに割り当て「ある発言を神なる言とは別のもので考えられた人間に帰し、ある発言を神にふさわしいものとして父なる神から生まれた言のみに帰する者は排斥される」¹³⁴。

ネストリオスの学友で、アンティオケイアの司教ヨアンネスに送った手紙の中でキュリロスは、教皇判決のゆえにネストリオスへの措置は止むを得ぬ、と弁解した一方¹³⁵、アンティオケイアの伝統的な主導権に対して、自教区の格上げを目指していたエルサレムの司教ユウェナリスに首都司教に対する判決執行への協力を要請した¹³⁶。

以上のようにキュリロスは教皇と連携して、ネストリオスの掛かるべき網を

¹³⁰ ACO I, 1, 1, p. 37:3-9; COD 53:17-32.

¹³¹ ACO I, 1, 1, p. 38:4-9; COD 55:19-21.

¹³² ACO I, 1, 1, p. 38:21-22; COD 56:9-11.

¹³³ ACO I, 1, 1, p. 40:3-4; COD 58:6-9.

¹³⁴ ACO I, 1, 1, p. 41:1-4; COD 59:30-41.

¹³⁵ ACO I, 1, 1, p. 92:3-93:3.

¹³⁶ ACO I, 1, 1, p. 96:27-98:3.

張ったが、後者も首都司教として十分な情報を持っていたので、対応を怠ったはずもない。特に出身地域であり、現代では、トルコの西南部、レバノン、シリア、パレスチナ、それらを含むローマ帝国のオリエンズ州の司教団はネストリオスにとって頼もしい仲間であった。

2. 3. ネストリオスとオリエンズ州司教団の対応

430年11月30日、日曜日の典礼の直後、聖職者や信徒の前でキュリオスの使節はネストリオスにケレスティヌス1世とキュリオスの書簡を渡した。ところが、一週間半前の11月19日、テオドシオス2世は西帝ヴァレンティアヌス3世との連名の勅書で翌年の聖霊降臨祭(6月7日)の開会予定で、最近に生じた混乱を収める目的で帝国の全司教を公会議のためエフェソスに召集した¹³⁷。その勅書は「公会議に先立って、また、満場一致で採択されるべき決議の前に教理の件で個々人による発議は一切あってはならぬ」と締めくくられていた¹³⁸。

勅書に加えて皇帝個人の手紙もキュリオスに届いた。その中で皇帝は混乱のための全責任をキュリオスに帰すと共に自分自身と皇族の女性にそれぞれ異なる手紙を送ったことで皇族までも分裂させようとしている、と戒める。皇帝のさらなる怒りを逃れようとするならば、公会議の判決に服する他はない、と手紙は締めくくられた¹³⁹。このようにキュリオスは被告の立場を再確認させられた。

ネストリオス自身はケレスティヌス1世に送った返書の中で、そもそも被告の立場を覆すため、キュリオスが首都司教を取り沙汰する理屈を考え出した、と警告し、「神の母」をめぐる地元の論争の実態を報告すると共に正統に理解される限り、その称号の使用に反対がない旨を先方に伝えた¹⁴⁰。教皇が定めた

¹³⁷ ACO I, 1, 1, p. 114:26-116:9; ACO I, 2, p. 31:32:31.

¹³⁸ ACO I, 1, 1, p. 115:30-31; ACO I, 2, p. 32:19-20.

¹³⁹ ACO I, 1, 1, p.73-74.

¹⁴⁰ ACO I, 5, p. 182:7-12; Nestoriana 181:16-20.

期限は12月7日に切れることになっていたこともあって、6日の土曜日、ネストリオスはかなり長い説教を行った。全文はマリウス・メルカトルのラテン語訳で残存している¹⁴¹。

「万物の主はわたしたちの本性を神性の衣として着用した。それはもはや神の実体から切り離せない衣類であり、万物の主の似姿である」¹⁴²と宣言したうえで、ネストリオスはまず、キリストを二つに分ける発想の創始者とされていたサモサタのパウロス¹⁴³をこう否認する。

「視えるものと視えざるものである方は唯一人の[神の]子であり、使う方と使われる方も唯一のキリストであり、二重の本性だが、唯一の子なのである」¹⁴⁴。

このように極端に神性と人性との区別を力説した見解を退けたうえで、両性の混合を裏付けるため、好んでマリアを「神の母」と呼んでいたアポリナリオス、アレリオスとエウノミオスへの注意を促す。この称号の排他的な活用が招く誤解を避けるため、マリアが「神の母」だけでなく「人の母」でもあることを認め、また、両性を一番的確に表現するため、「キリストの母」という自らの調停案を評価してほしい、とネストリオスは訴える。また、神なる言と父なる神のそれぞれの固有性を否定したサベリオスとフォティノスを相手取り、ネストリオスは言それ自身と言が肉となった人のそれぞれの固有性を十分考慮するには「神の母」よりは、「キリストの母」のほうが適切な表現だ、と訴え、平和的な対話を呼びかける台詞で説教を締めくくる。翌7日の日曜日に行われたより短い説教で、ネストリオスはもう一度サモサタのパウロスを相手取り、

¹⁴¹ ACO I, 5, p. 39-45.

¹⁴² ACO I, 5, p. 39:33-35.

¹⁴³ 上掲拙論「ネストリオスの問題提起」5-7頁参照。

¹⁴⁴ ACO I, 5, p. 40:8-10.

神なる言ないし神の独り子がキリストにおける唯一の主体であるという従来の見解を再確認した¹⁴⁵。

キュリオスの使節がアンティオケイアから持参してきた信書の中でヨアンネスは学友にローマとアレクサンドリアの判断を穩健に熟考するよう勧めたが¹⁴⁶、返書の中でネストリオスはキュロスとの対決の経緯を詳述し、追伸で先日に行った二つの説教への反応がよかったことを知らせた。キュロスから送られてきた十二破門条項の写しは返書に添付されていた¹⁴⁷。これを受けてヨアンネスは多くの司教に手紙を送り、ネストリオスが最近に行った説教のため首都に平安が戻ったことを報告する共に十二破門条項がアポリナリオス以上に赤裸々な単性論を展開していることへの驚きを伝えた¹⁴⁸。さらに、直轄下にあったキュロスの司教テオドレトスとサモサタの司教アンドレアスとに反論を依頼した。431年の四旬節までに完成した前者の反論ではキュロスがアポリナリオス派として直撃された¹⁴⁹。アンドレアスもネストリオスの正統性を弁解したが、キュリオスを異端や誤謬のかどで非難することを避けた¹⁵⁰。

3. 公会議の経緯

ローマにとって公会議の召集は歓迎すべき事態ではなかった。召集の勅書が十分な余裕をもって出されたにもかかわらず、公会議への使節が派遣されたの

¹⁴⁵ ルスティクスによるラテン語訳 (ACO I, 4, p. 6-7) はマリウス・メルカトル (ACO I, 5, p. 45-46) のそれに優先させるべきである。

¹⁴⁶ ACO I, 1, 1, p. 93:4-96:26.

¹⁴⁷ ACO I, 4, p.4-6.

¹⁴⁸ エフェソス公会議においてキュロスを支持していたカッパドキアのカイサレイアの司教フィルモスに送られた手紙しか残存していないが (ACO I, 4, p. 7-8) , 多くの司教に同じ手紙を送ったに違いない (ACO I, 4, p.8:34) 。

¹⁴⁹ テオドレトスの駁論の断章はキュリオスの弁論の中で引用されている (ACO I 1, 6, p. 110-146 ; PG 76, 385-452) 。 二つのラテン語訳が残存している (ACO I, 5, p. 142-165. 249-287) 。

¹⁵⁰ アンドレアスの駁論の断章はキュリオスの弁論の中で引用されている (ACO I, 7, p. 33-65; PG 76, 316-385) 。

は431年5月15日、すなわち開会予定日の2週間前だった。このことから推察されるように、教皇は前年8月、ローマで開かれた教会会議の後もう一度ネストリオスが起こした問題が審議されることへの不満を先方に暗示しよう、と意図したのだろう¹⁵¹。

3. 1. 開会の前夜

キュリロスにとっても公会議の召集は予想外であったに違いない。しかし何よりも十二破門条項への反発の激しさに驚いたのだろう。ケレスティヌス1世の返書からしか内容は分らないが、キュリロスは教皇への手紙ではかなりの心配を表明したようである。教皇からの委任がまだ生きているか、公会議の席でそれをどのように実施するかという問い合わせに教皇は、被告の回心と教会の融和を優先させるべきだ、とかなりあいまいな回答をした¹⁵²。

公会議運営のため、テオドシオス2世は親衛隊司令官カンディディアノスを皇帝代理としてエフェソスに遣わし、公会議に宛てた勅書の中で、皇帝代理には審議には干渉する権限がないものの、教理などの問題が順序正しく審議・決議されるよう図るのが皇帝代理の職責であると、伝え、ネストリオスの親友で宮廷高官エイレナイオスがもつばら個人の資格でエフェソスに行く、とも強調した¹⁵³。

エイレナイオスや多数の司教、聖職者に伴われて、ネストリオスは最初に到着した。アジア州の教会への首都司教の干渉増大に不満を抱いていた当地の司教メムノンの誘いで市議会は慣例の出迎えを拒否し、代わりに一行は住民の抗

¹⁵¹ 431年5月8日、三名の使節に与えられた指示は、前年8月の決議が撤回されないように注意すること、さらに、キュリロスと十分協議しながらも、最終的判断を自らは保留せねばならぬ、ということであった(ACO I, 2, p. 25)。彼らは公会議(ACO I, 2, p. 22-24; ACO I, 1, 1, p. 55-57)と皇帝に宛てた教皇書簡(ACO I, 2, p. 25-26)をエフェソスへ持参していった。

¹⁵² ACO I, 2, p.26-27.

¹⁵³ ACO I, 1, 1, p. 120-121; ACO I, 3, p. 51:14-52:16.

議で迎えられた。その後もネストリオスと同伴者に教会堂の使用が許されなかった¹⁵⁴。

開会予定の聖霊降臨祭4・5日前にキュリロスは約50名の司教や大勢の聖職者、修道士や警備員と一緒に、聖霊降臨祭5日後にはユウェナリスが15名の司教と共にパレスチナから到着した。その間メモノンには約40名の司教を直轄下のアジア州から、15名の司教をパンフィリア州から集めた。

ローマの使節やオリエンズ州司教団の到着を待つ間、キュリロスの支持者は日々各教会の説教壇からネストリオスをキリストの神性を否定し、サモサタのパウロスのようにキリストを二人の子に分ける異端のため攻撃したが、ネストリオスはもっぱら私的な会合で十二破門条項を元に相手をアレリオス、エウノミオス、アポリナリオスの異端を唱導するかどで罵倒した。こうしたやり取りで誤解も頻発しただろう。アンキュラの司教テオドトスは一例を提供してくれる。彼によればネストリオスは「2・3カ月しか成長していない者をわたしは断じて神と呼ばない」¹⁵⁵、と言い張ったそうである。また、メリテネの司教アカキオスによれば、ネストリオスは父も聖霊も肉とならない限り神なる言は肉と成りえなかったことを論証しようと努めた¹⁵⁶。

公会議の開会を待つ間、キュリロスにとってますます深刻な問題になったのは、ネストリオスの件で審議に応じる条件として、すでに集まっていた司教のうち約60名が十二破門条項の撤回を要求したことである。これにエフェソス城内に散発した暴動の増加が加わった。流血も起こる中で、近辺の基地から兵がエフェソスに集められ、分けてもネストリオスと同伴者の警備に当てられた。

なぜオリエンズ州司教団の到着があれほど遅れたのだろうか。主要な理由はアンティオケイアからエフェソスまでの距離とアンティオケイアの影響下にあった地域の広さであった。陸上のアンティケイアからエフェソスまでの旅は40

¹⁵⁴ ACO I, 4, p. 30:33-31:1.

¹⁵⁵ SOCRATES, *Historia Ecclesiastica* VII, 34 (PG 67, 813C).

¹⁵⁶ ACO I, 1, 2, p. 38:3-30.

日掛かる。小人数旅行は危険を伴うので、安全なキャラバンに編成されるため、アラビアやペルシアの司教も、アンティオケイアに集まらなければならない。431年4月19日の復活祭当日から8日間は各司教が任地を離れられないので、早くても4月27日以降オリエンズ州司教団のキャラバンはアンティオケイアから出発したであろう。

キュリオスの問い合わせに応じて、6月20日、キャラバンの到着は後5・6日かかる、とヨアンネスはキュリオスに知らせた¹⁵⁷。直ちに、キュリオスは、皇帝代理と相談もせず、教皇の委任でしか許されない権限で、即時の開会を決意した。後でこの決意を正統化するためキュリオスは、学友を援助せざるを得ない辛い状況を回避するためヨアンネスが故意に到着を遅らせたと決めつけた¹⁵⁸。キュリオスが唱えたもう一つの自己弁明はエフェソス滞在中の一部の司教の健康状態であった¹⁵⁹。後5・6日待っていたならば、それが顕著に悪化した、とでも考えられるのだろうか。むしろ、十二破門条項への風当たりが厳しくなる中で、オリエンズ州司教団の到着が間近であるという情報がキュリオスに既成事実を造ろう、と決断させたと考えたほうが自然だろう。6月21日の日曜日、キュリオスとユウェナリスの主催で翌日の開会が決定された¹⁶⁰。

¹⁵⁷ ACO I, 1, 1, p. 119:4-25.

¹⁵⁸ ACO I, 1, 3, p. 67:2-9; 83:16-23.

¹⁵⁹ ACO I, 1, 2, p. 8:29-31.

¹⁶⁰ 記録と言えるものとしては、アレクサンドリアで編成された資料しかない (ACO I, 1, 2, p. 3-67)。565年頃コンスタンティノポリス滞在中のルスティクスはネストリオスの友人エイレナイオスが『悲劇』の題で多くの資料と共に残した報告書を発見し、ラテン語に翻訳した (ACO I, 3-4)。中にはオリエンズ州司教団到着前の開会に抗議するため68名の司教がキュリオスとユウェナリスに当てた書簡 (ACO I, 4, p. 27:28-30:4) と、開会出席の際に受けた扱いに抗議するため皇帝代理が公会議に送った書簡と皇帝に送った報告書 (ACO I, 4, p. 31:31-33:28) がある。アレクサンドリア由来の資料には68名もの司教と皇帝代理の抗議については痕跡すら見当たらない。以下については、L.P. SCIPIONI, *op. cit.* 213-222; A. GRILLMEIER, *op. cit.* 484-487; A.D. HALLEUX, "La Premier Session du Concile d'Éphèse", *ETHL* 69 (1993) 48-47 参照。

3. 2. 開会の強行とネストリオスの罷免

6月22日の月曜日、約150名の司教は「神の母」にちなんだエフェソス司教座聖堂に集まった。アレクサンドリアの首席書記官ペトロスが議題を告知し始めた時、通常の護衛に伴われて、皇帝代理カンディディアノスは即時の開会に反対を表明した68名の司教の代表者と共に入場し、オリエンス州司教団を抜きにした開会が公会議に宛てた勅書に違反するものであり、ゆえに無効だ、と宣言した。そこで執行部が勅書の朗読を要請したが、朗読は開会公認と同等になるので、カンディディアノスはそれを拒否した。しかし、内容を知らなければ皇帝の指示をどう守るべきか分からない、という狡猾な反論に負けて、カンディディアノスは要請に応じた。そこで開会が公認された、ということになり、審議には干渉する権限が皇帝代理にはない、と勅書で述べられている、という理由で「あなた方から、不当にかつ武力で追放された」¹⁶¹とカンディディアノスはキュリロスの警備隊による扱いを振り返る。以降すべてはアレクサンドリアの書記局で描かれたシナリオどおりに動いた。

いまや公会議の首席書記官を務めるペトロスはケレスティヌス1世の介入までの論争経緯をまとめる報告書を朗読した後、ユウェナリスの発議で430年11月19日の公会議への召集の勅書が朗読された。メムノンが開会遅延の理由を尋ねたことを受けて、キュリロスはオリエンス州司教団到着前の開会決意へと導いた経緯を報告した。その後ネストリオスに関わる審議が始まった。

前日にネストリオスは被告としての出頭を要請されていた。当日には出頭要請を繰り返すため、二回代表団がネストリオスの滞在先に派遣されたが、警備隊によって本人との接触を妨げられた。口頭でネストリオスは、全司教の出席で公会議が合法的に開会された時、出頭する用意があるものの、現状では出頭しない、と代表団に知らせた。こうして出席拒否が十分に確認されたので、ユウェナリスの発議で欠席裁判が可決された。

¹⁶¹ ACO I, 4, p. 32:28.

またもユウエナリスの発議でニカイア信条が唱えられた後、キュリロスがネストリオスに送った第二の書簡が読み上げられた。これを受けてキュリロスは自分の書簡がニカイア信条に一致しているかどうかの判断表明を参加司教全員に要請した¹⁶²。ユウエナリスから始まって、全員が肯定的な判断を表明した¹⁶³。アマセアの司教パラディオスの発議でネストリオスがキュリロスに送った第二の書簡が朗読された後には、キュリロスはその書簡がニカイア信条に一致しているかどうかの判断表明を参加司教全員に要請した¹⁶⁴。再びユウエナリスから発言が始まった。パラディオスは書簡で練り広げられている冒瀆が分かった時点から、耳を手でふさぎ、恐怖のあまり何も表明できないと宣言した¹⁶⁵。34名の判断だけが記録されているが¹⁶⁶、後は「ネストリオスは排斥されよう」といった合唱となっている¹⁶⁷。なぜネストリオスの書簡がニカイア信条に矛盾しているかの説明を試みたのはメリテネの司教アカキオスだけであった。

「神の空の神殿だけが誕生と死を被った、と説いた。しかも、このいわれのない見解を聖書に帰した。神にではなく、人のみに誕生と受難を帰するような語り方をしている。これを問題にした最も聖なる尊き司教キュリロスの書簡を明らかに中傷した。すなわち、神が苦しみ得るといった主張をキュリロスに帰したことで、彼を中傷した。本人も、敬虔に考える人の誰でも敢えてそのようなことを考えたことはない。最後に、ネストリオスは呼称においては、肉と神との合一を認めるものの、現実における合一を問いつまされた度に、それを完全に否定した。」¹⁶⁸

¹⁶² ACO I, 1, 2, p.13:19-25.

¹⁶³ ACO I, 1, 2, p.13:26-31:5.

¹⁶⁴ ACO I, 1, 2, p. 31:14-17.

¹⁶⁵ ACO I, 1, 2, p. 33:8-14.

¹⁶⁶ ACO I, 1, 2, p. 31:18-35:29.

¹⁶⁷ ACO I, 1, 2, p. 35:30-36:7.

¹⁶⁸ ACO I, 1, 2, p. 32:32:21-27.

またもユウェナリスの発議でネストリオス宛ての教皇書簡が朗読された後、首席書記官ペトロスはキュリロスからネストリオスに送られたもう一つの書簡がある、と宣言した。参加司教の間でエフェソスへの到着後すぐにも問題となった十二破門条項で終わるネストリオスへの第三の書簡である。今回の朗読の後、キュリロスは発言を控えた。書簡はケレスティヌス1世のそれと共に公会議の資料に添付された¹⁶⁹。両書簡をネストリオスに渡すためコンスタンティノポリスに來た二人の司教の報告が行われた後に、エフェソス滞在中のネストリオスの言行が報告された¹⁷⁰。その後、首席書記官ペトロスは教父文献¹⁷¹とネストリオスの著作から抜粋された箇所名句集を朗読した¹⁷²。これも公会議の資料に添付された。野蛮族の侵略やアウグスティヌスの死去を報告するカルタゴの司教カブレオルスの書簡も資料に添付されたのは、ケレスティヌス1世の書簡に加えてもう一人の西方教会代表の証言が望ましかったからであろう¹⁷³。現行の資料によれば、キュリロスは簡単に書簡への歓迎を表明したうえで、「信仰の教理を強めよう」と呼びかけた¹⁷⁴。これが直ちにネストリオスの罷免決議に繋がった。

「その他の問題に加えて、最も卓越したネストリオスは我々の出頭命令に従うことを断り、我々がそのもとに遣わした聖なる敬虔な司教たちを受け入れなかったので、彼が不敬虔に述べたことの審議を我々は余儀なくされた。

¹⁶⁹ ACO I, 1, 2, p. 36:7-37:5.

¹⁷⁰ ACO I, 1, 2, p. 37:6-38:34.

¹⁷¹ ACO I, 1, 2, p. 39:1-45:8.

¹⁷² ACO I, 1, 2, p. 45:9-52:5. ネストリオスは当該箇所の大半を認めたが (LH 204-208), 少数が歪曲された、とも証明している (LH 196)。確認できる箇所は全部 430 年 12 月 6-7 日後の期間に属する。

¹⁷³ ACO I, 1, 2, p. 52:16-54:8. 書簡を持参してきたベッスラの署名が判決についていないので、書簡がすでに 6 月 22 日に届いていたことは確かではない。

¹⁷⁴ ACO I, 1, 2, p. 54:9-13.

読み上げられたその書簡や著作，およびその場に居合わせていた人々から証言されたこの都市における最近の発言から次の結論に至った。教会の諸規定および我々の至聖なる教父と共同奉仕者であるローマの司教ケレスティヌスの書簡に強いられて，多くの涙を流しながらも以下の判断を下す。この至聖なる公会議を通じてネストリオスが司教職を剥奪され，司教団から追放されることを我らの主イエス・キリストが決定なされた。」¹⁷⁵

現行の資料では判決に 197 名の署名がついている¹⁷⁶。キュリロスがアレクサンドリアの住民に送った報告によれば，会場の周辺で判決を待っていた群衆は，街が灯りで照らされる中，大声で歓迎を表明した¹⁷⁷。翌日，判決の通知はネストリオスに手渡された。

「神の恵みと最も敬虔にしてキリスト教的皇帝の命令によってエフェソスに集まっている聖なる公会議から，新しいユダ，ネストリオスへ。貴殿の空しい諸説教および諸規定への不従順のゆえに，今月 22 日，聖なる公会議によって貴殿が罷免され，教会諸規定の定めによって教会において一切の地位を持たないことを知りなさい。」¹⁷⁸

はじめて街の掲示で判決を知った皇帝代理は公会議に抗議文書，皇帝に判決の写しと共に報告書を送った¹⁷⁹。公会議も皇帝に報告書を送り¹⁸⁰，コンスタンティノポリスの住民にネストリオスの罷免を知らせた¹⁸¹。もちろん，後者は皇

¹⁷⁵ ACO I, 1, 2, p. 54:16-28; COD 61:27-62:12.

¹⁷⁶ ACO I, 1, 2, p. 55-64.

¹⁷⁷ ACO I, 1, 1, p. 117:25-118:13.

¹⁷⁸ ACO I, 1, 2, p. 64:6-11.

¹⁷⁹ 上記注 160 参照。

¹⁸⁰ ACO I, 1, 3, p. 3:4-5:23.

¹⁸¹ ACO I, 1, 2, p. 64:16-65:10.

帝に上訴した¹⁸²。6月29日の勅書は、6月22日の決議を無効とし、全司教参加のもとに問題の再審議を命じると共に問題解決まで全司教にエフェソスを離れることを禁じた。さらに、カンディディアノスに加えてもう一人の皇帝代理の派遣を先方に知らせた¹⁸³。約2週間後、すなわち勅書がエフェソスに届いたはずの時点では当地の状況が一変していた。

3. 3. 二つの会議への分裂

6月26日、オリエンス州司教団のキャラバンが到着した直後に彼らの会議が開かれ¹⁸⁴、皇帝代理カンディディアノスが公会議に関する勅書を朗読したので、この会議もキュリオスのそれと同様に公会議と公認されることになった。審議はこの数日に起こったことについての報告で始まった。そこでキュリオスはもちろん、地元の住民を暴動へ駆り立て、罷免がまだ決定されていなかったのにネストリオスと同伴者に聖霊降臨の祭日にさえ教会堂の使用を許さなかったエフェソスの司教メムノンが激しく非難された。これを受けて直ちに二人の罷免と追隨者の破門が決定され、和解の条件として十二破門条項の排斥が義務付けられた¹⁸⁵。この決定は皇帝代理自身からキュリオスのもとに集まっていた司教たちに通知されることになっていたが、接触の試みは不成功に終わった、と数日後の集まりで報告された¹⁸⁶。

7月10日、教皇使節の到着でキュリオス側の立場が著しく強化された。当日にキュリオスは自分を支持していた司教を司教館に集めた。そこで使節が持参してきたケレスティヌス1世の公会議宛ての書簡がラテン語とギリシャ語で読

¹⁸² ACO I, 1, 5, p. 13:24-14:25; ACO I, 4, p. 30:5-31:29.

¹⁸³ ACO I, 1, 3, p. 9:23-10:23.

¹⁸⁴ ギリシャ語 (ACO I, 1, 5, p. 119:1-124:10) とラテン語 (ACO I, 4, p. 33:13-36:40) の資料が残存。

¹⁸⁵ 経緯と決定を報告する書簡は皇帝 (ACO I, 1, 5, p. 125:29-127:11) と首都聖職者・元老院・信徒 (ACO I, 1, 5, p. 127:13-129:25) に送られた。

¹⁸⁶ ACO I, 4, p. 44:22-26.

み上げられた。こうして教皇によるキュリロスの委任が再確認されたうえで、使節には6月22日の資料を自ら検査する機会が与えられた。翌日に開かれた会議で使節はまずネストリオスに対する自らの判決を告げた。

「わたしたちの主イエス・キリストを軽率に冒瀆し、ここに代表される東方と西方のすべての諸教会の信仰の基準を犯したがゆえに『その務めは他の人が引き受けるがよい』[使 1:20]といわれた者のように、ネストリオスは罷免され、追放され、かつ、聖なるカトリック教会との交わりから断たれていることを知るべきである。」¹⁸⁷

このように第一の司教座の代表として独自の判決を下したうえで、初めて使節は6月22日の公会議の判決に署名した¹⁸⁸。そのような手続きによる東西教会の完全な一致を知らせる書簡は皇帝に送られた¹⁸⁹。また、16日と17日の会議で、ヨアンネス側は出頭要請に応じなかったため排斥され、後者によるキュリロスとメムノンの罷免が無効と宣言された。詳細について、ケレスティヌス1世¹⁹⁰と皇帝に報告書が送られた¹⁹¹。

7月22日には、現行の資料で第六総会に数えられている長時間の会議でフィラデルフィアの教会で異端からの改宗者に認めさせ、モプスエスティアのテオドロスが作成者とされた長文の信条が退けられたうえで、ニカリア信条とは異なる信条の作成と使用が厳粛に禁じられた¹⁹²。主要な狙いは、キュリロス側の会議で教理の問題もきちんと取り上げられたことを印象づけることであったの

¹⁸⁷ ACO I, 1, 3, p. 61:17-20.

¹⁸⁸ ACO I, 1, 3, p. 62:11-24.

¹⁸⁹ ACO I, 1, 3, p. 63:22-64:34.

¹⁹⁰ ACO I, 1, 3, p. 5:26-9:21.

¹⁹¹ ACO I, 1, 3, p. 28:20-30:33.

¹⁹² ACO I, 1, 7, p. 84-117. 後代への影響については、拙論「中世における東西両教会間の核心問題」『南山神学』（第2号・1979年）43-94頁、（第3号・1980年）43-80頁参照。

だろう。

詳細を述べる暇も必要もないが、両会議の代弁者が首都で立ち回る中で、キュリロスの誘いで 46 年も修道院を出たことのないダルマティオスは大勢の修道士や信徒を伴って皇帝を訪れ、ネストリオスへのしかるべき措置を求めた後、聖モキオス教会で行った説教の際にネストリオスの破門を宣言した¹⁹³。以来、何度もネストリオスへの大衆デモが繰り返された。

8 月の初め頃、皇帝の新たな勅書を携えて、財務高官ヨアンネスは第二皇帝代理としてエフェソスに到着した。勅書は競い合っていた二つの会議を一つとして扱い、キュリロス、メムノン、ネストリオス — この順序で — の罷免を承認し、満場一致の決議までの審議を命じた¹⁹⁴。勅書に、バロイア（現アレppo）の老司教アカキオスが両派調停のため皇帝に送った信条の草案が添付されていた。父と子との同一本質性を共通の前提としながら、アンティオケイア伝承の用語にのっとり、神の身分と僕の身分との区別（フィリ 2:6-7 参照）が肯定される一方で、世に先立って父から生まれた言と肉にしたがって乙女マリアから生まれたキリストとの一致に加えて、神なる言の不変性が力説された¹⁹⁵。

ネストリオスがカンディディアヌスの、キュリロスがもう一人の高官の官邸で、メムノンが司教館で禁足された後¹⁹⁶、第二皇帝代理ヨアンネスは数回両派と合同会議を開いた。キュリロスの十二破門条項はアレイオスとアポリナリオスの異端と一致するという理由で、オリエンス州など司教たちはその排斥にこだわった。そのため、キュリロスの味方は彼らをネストリオスと同じ誤謬を唱えるかどで攻撃した。ついにヨアンネスは交渉を断念し、アンティオケイアの司教ヨアンネスの名前で皇帝に宛てた書簡を携えて首都に帰った¹⁹⁷。この書簡

¹⁹³ ACO I, 1, 2, p. 65:25-66:9; 68:12-69:6.

¹⁹⁴ ACO I, 1, 3, p. 31:3-32:10.

¹⁹⁵ ACO I, 4, p. 243:34-245:27.

¹⁹⁶ ACO I, 4, 9, p. 53-55.

¹⁹⁷ ACO I, 1, 7, p. 69:1-70:31; ACO I, 4, p. 55:18-58:23.

には、アカキオスの草案に基づいてまとめられた信条も記載されていた¹⁹⁸。

キュリロス派から激しい抗議文が届いたことを受けて、皇帝は両派からそれぞれ8名の代表者を首都に召いた。ヨアンネスの率いる代表団がエフェソスを去ってから、以前からの申し出に応じて、地方総督アンティオコスハネストリオスにエウプレピオス修道院への帰還を許した¹⁹⁹。首都では修道士の動乱が治まらなかったため、会場はボスポラス海峡対岸のカルケドンに移され、9月11日以降、皇帝と元老院の前で5回ほど会議が開かれた。

第一回目の会議でヨアンネスはアンティオケイア伝承のキリスト論を弁解し、好意的な反応を得た。しかし、ネストリオスの名前だけでも挙げられることにさえ苛立ちを表明するまでも²⁰⁰皇帝の姿勢がますます頑なになる中、ヨアンネスらは買収への疑いを強め、皇帝に故郷への帰還許可を要請した²⁰¹。実際に以前からアレクサンドリアから膨大な金額や大量の進物が皇室などの関係者に贈られてきた²⁰²。

結局、皇帝はキュリロス側の代表団と共にコンスタンティノポリスに戻り、日付が正確に分からない二つの閉会勅書を出した。一番目は、相変わらず禁足となっていたキュリロスとメムノン以外の司教に自由な行動を許したが²⁰³、二番目はキュリロスにアレクサンドリアへの帰還とメムノンにエフェソスの司教職保持を許した²⁰⁴。ところがキュリロスは皇帝の許可を待たず、10月31日にはアレクサンドリアに戻っている。おそらく買収によって厳しい監視を逃れ、皇帝の手も及び難いわが城砦に逃れることに成功したのだろう。「センセーショナルな仕方であざけられたテオドシオス2世には、形を守るため、キュリロ

¹⁹⁸ ACO I, 1, 7, p. 70:15-20.

¹⁹⁹ ACO I, 1, 7, p. 71:5-14.

²⁰⁰ ACO I, 4, p. 69:37-70:1.

²⁰¹ ACO I, 4, p. 71:31-73:29.

²⁰² ACO I, 4, p. 85:1-12; 222:6-225:11.

²⁰³ ACO I, 4, p. 69:7-10.

²⁰⁴ ACO I, 4, p. 73:39-74:2.

スに対して自らアレクサンドリアへの帰還を許す他はなかった」²⁰⁵。オリエンス州司教の一人は閉会の経緯をこう振り返っている。

「多くの要請に応じて皇帝は、エジプト人 [キュリロス] とエフェソスのメムノンも自分の司教座を守る一方で、全員が各々の司教座に戻るように命じた。罪のない人 [ネストリオス] がかりうじて自分の修道院に戻ることができる許可を得たのに対して、自分の司教座に戻ることができる許可を得たほどに、エジプト人は自らの進物で皆の目をくらませた。」²⁰⁶

ネストリオスの罷免で首都司教座が空席になったことで、反対の先頭に立っていたプロクロスとフィリッポスは再び候補に立ったが、皇帝は予想外な言行を覚悟しなくてもよい平凡で高齢の修道司祭マクシミアノスを選んだ²⁰⁷。

4. 皇帝主導の合同達成

この人事の前と後にヨアンネスの率いる代表団がカルケドンから皇帝に送った三つの抗議文は一方の陣営の増大する憤りを物語る²⁰⁸。ヨアンネスの主催でタルソスに開かれた教会会議でキュリロス自身をはじめ、カルケドンでその弁解をしていた司教が破門された²⁰⁹。これを受けて、キュリロス側の代表者に囲まれていた新首都司教の主催で開かれた会議で数人の反対派司教が罷免された²¹⁰。このように東方キリスト教の世界で分裂が深まる中、432年3月15日、教皇ケレスティヌス1世は皇帝、新首都司教、首都の聖職者と信徒および公会議に

²⁰⁵ L.I. SCIPIONI, *op. cit.* 242.

²⁰⁶ ACO I, 4, p. 71:25-30.

²⁰⁷ SOCRATES, *Historia Ecclesiastica* VII, 34 (PG 67, 818B).

²⁰⁸ ACO I, 1, 7, p. 72:14-76:33.

²⁰⁹ ACO I, 4, 194:11-13.

²¹⁰ ACO I, 1, 7, p. 137:38-138:47.

も書簡を送り²¹¹、公会議への書簡の中でネストリオスが味方の多いであろう出身修道院から遠く離れた地に追放されるべきだ、と訴えている²¹²。

4. 1. 両陣営調停への取り組みの開始

ケレスティヌス1世の書簡が届いた後、皇帝は常設司教会議の同意を得て、キュリロスとヨアネスだけをニコメディアに招き、和解させようと決意した。しかし後者に示された和解条件はネストリオスの罷免を承認し、その教えを排斥することであった²¹³。もちろん、こうした一方的な条件では和解があり得ないので、ニコメディアの会合は成立しなかった。しかし以来、皇帝は再びアカキオスに調停案作成を依頼するなど、積極的に和解交渉に関わっていく。

交渉の際に教皇の支援を得るためエジプトから代表団がローマへ派遣されたが、432年7月27日、ケレスティヌス1世が亡くなったので代表団は後任のシクストゥス3世に迎えられた。彼も前任者と同様にエフェソス公会議の決義の承認を和解条件としたが、アンティオケイアから離れた亡命地へのネストリオスの移転を要請しなかった²¹⁴。

アカキオスが用意した調停案は、ニカイア信条の正確な理解についてアタナシオスがコリントの司教エピクテトスに送った書簡²¹⁵を根拠にまとめられ、六命題から成り立っていた。これはアンティオケイアで開かれた教会会議にかけられ、皇帝主導の交渉を担当していた高官アリストラオスを通じて、結論がキュリロスに伝えられた²¹⁶。そこで提案された合同の要は、ニカイア信条とその正確な理解を主題化したアタナシオスの手紙に「諸書簡あるいは諸条項によって付け加えられた諸教理を、共同であるものを乱すものとして、わたしたちは

²¹¹ ACO I, 2, p. 88:18-101:17.

²¹² ACO I, 2, p. 99:37-100:12.34-36.

²¹³ ACO I, 1, 4, p. 3:3-5:8.

²¹⁴ ACO I, 1, 7, p. 143:25-145:37.

²¹⁵ PG 26, 1049-1070.

²¹⁶ ACO I, 4, p. 92:31-93:4.

追い払う」²¹⁷、ということであった。言いかえれば、キュリロスがネストリオスに送った書簡、分けても十二破門条項の否認に賛成すれば、アンティオケイア側がネストリオスの復帰をあきらめる、という提案であった。

これを受けてキュリロスはアカキオスとの文通を開始した。ネストリオスに送った書簡、分けても十二破門条項の明確な否認を退ける一方で²¹⁸、アカキオスの仲介によって成立する教書で自己の正統性を証明する用意がある、と伝えた²¹⁹。自らアポリナリオスを一度も支持したことはなく、他の異端と並んでそれをしっかりと排斥する、と力説したうえで、自分の見解をこうまとめる。

「キリストの身体には靈魂がないと主張することもない。むしろ理性的な靈魂によって生かされていることを告白する。さらに、一部の主張とは違って、[人と神との] 混ぜ合わせ、組み合わせや混合があったことも支持しない。神の言は、自己固有の本性にしがって、変わることができず、取り換えられず、苦しみを受けることができないことを知っている。実際に、神性は苦しみを受けることができず、変化のいかなる影も忌み嫌う。……聖書が知らせるように、唯一の、常に同じ方であるキリストと主、神の独り子が肉においてわたしたちのために苦しみを受けた、とわたしは言う。」²²⁰

アカキオス自身はキュリロスの譲歩に満足を表明したが²²¹、アンティオケイアで代理として交渉に当たっていたエメサの司教パウロスと当地の司教ヨアンネスは慎重な姿勢を貫いた。とりわけ以前に十二破門条項を徹底的に論駁した

²¹⁷ ACO I, 4, p. 93:1-2.

²¹⁸ ACO I, 1, 7, p. 140:37-142:15.

²¹⁹ ACO I, 1, 7, p. 147:22-150:38.

²²⁰ ACO I, 4, p. 96:28-36.

²²¹ ACO I, 1, 7, p. 146:34-147:20.

キュロスの司教テオドレトスの助言もあって、アポリナリオスの排斥と混合の明確な拒否によってキュリロスが実質的に十二破門条項を否認した、とヨアンネスは判断し、アンティオケイア、ベロイア、ヒエロポリスで開かれた教会会議を経て、432年の晩秋、パウロスを和解交渉のためアレクサンドリアに派遣した。これに抗議したヒエロポリスの司教アレクサンドロスに答えて、「今や哲学や殉教の時ではなく、全地球墮落と教会混乱のときだ」²²²とヨアンネスは跳ね返した。交渉から期待していた突破口は、ネストリオス個人を犠牲に供することを引き換えに、ネストリオスが代弁してきたアンティオケイア伝承の要をキュリロスに認めさせることであった。

4. 2. 「天よ、喜び祝え、地よ、喜び踊れ」

433年4月、キュリロスは題にある詩篇96編11節の引用で始まる書簡で和解交渉の結果を歓迎した。パウロスが持参してきた書簡の中で、ヨアンネスはキュリロスからアカキオスに送られた書簡によって主要な問題が払拭されたので、なおも残っている思惑については和解の後にも十分な説明が得られるという期待を表明した²²³。ヨアンネスの書簡には信条と補足説明が添付されていた²²⁴。信条は431年8月エフェソスでオリエンズ州などの司教たちの間で合意され、ヨアンネスの名前で皇帝に宛てた書簡に記載されていた信条と同一のものである。今回、ニカイア信条の継承を浮き彫りするために付け加えられた箇所にも傍点を付する。

²²² ACO I, 4, p. 113:21-22.

²²³ ACO I, 4, p. 115:7-117:7.

²²⁴ ギリシャ語原文は和解の際にキュリロスとヨアンネスの間に交わされた書簡 (ACO I, 4, p. 8:27-9:8; 17:5-20) の中に、ラテン語訳はカルタゴの執事リベラトゥスがエフェソス公会議から第二コンスタンティノポリス公会議までまとめた異端史の中に保存されている (LIBERATUS, *Breviarium causae Nestorianorum et Eutychianorum* 8 (ACO II, 5, p. 106:33-107:8; PL 68, 983B-C)。手に入りやすい資料としては、COD 69:39-70:28; DS 272-273 参照。

「神の独り子、わたしたちの主イエス・キリストは完全な神と理性的な魂と体から成る完全な人であることを告白する。主は、神性にしたがって、世に先立って、父から生まれ、終わりの時には、わたしたちのため、また、わたしたちの救いのため、乙女マリアから生まれた。神性にしたがって父と同一本質であり、人性にしたがってわたしたちと同一本質である。なぜなら [二つの] 本性の合一が成立したからである。ゆえに、私たちは唯一のキリスト、唯一の子、唯一の主を告白する。この混合なしの合一にのって、私たちは聖なる乙女が神の母である、と告白する。なぜなら、神なる言は肉となり、人となり、受胎の時から乙女マリアから受け取った神殿を自分自身と一つにしたからである。」²²⁵

傍点を付した箇所はニカイア信条の引用である。そのキーワードを中心に、神的本性と人間的本性との区別が力説されている一方、神の独り子が人間イエスの主体であることも明快に承認されている。そして、神の独り子が人間イエスの主体であるがゆえに、この人間を産んだマリアはまさしく「神の母」と呼ぶことができる。431年8月エフェソスで書かれた以上の信条には、ヨアンネスの書簡では直接にキュリオスの第四破門条項に应える補足説明が追加されている。

「主に関する福音書と使徒の言葉について、聖なる著者たちは一部の言葉を唯一のプロソポンに関わる事柄として区別なしに用いている一方で、一部の言葉を二つの本性に関わる事柄として区別していることを知っている。こうして、神にふさわしい発言をキリストの神性に、低次の発言をその人性について伝えている。」²²⁶

²²⁵ ACO I, 1, 4, p. 8:27-9:5; DS 272.

²²⁶ ACO I, 1, 4, p. 9:5-8; DS 273.

信条と補足説明の受理はキュリロスに相当な決断を余儀なくしたに違いない。その決断をためらった理由の一つは自分にかかってきた皇帝圧力の痕跡すら、ヨアンネスの書簡から全然伝わってこなかったことであつた。しかし、キュリロスが受理をためらった最大の理由は、自分にとってヨアンネスを始めオリエンズ州の司教団によるネストリオスの破門、その諸説の排斥及び首都司教へのマクシミアノスの就任の承認はどうしても譲れない和解条件であつた。

パウロスは個人名でこの条件を満たす文書をキュリロスに提出し²²⁷、また、432年12月25日と433年1月1日、キュリロスも参列している典礼でマリアが「神の母」であることを説く説教を行った²²⁸。宮廷や首都修道士の新たな支援を得ようと、あの手この手を打った末、キュリロスはついにさらなる抵抗を諦め、相手の条件を受け入れることを引き換えに、ネストリオスの破門、排斥および新首都司教の就任を正式に承認してもらうため、パウロスを二人のアレクサンドリアの聖職者と共にアンティオケイアに遣した²²⁹。

当地で行われた交渉の結果、ヨアンネスがネストリオスを弾劾し、現首都司教就任の正当性を認めたことを受けて、パウロスと共に遣わされた二人の聖職者がキュリロスによる合同信条の受理を表明する書簡をヨアンネスに渡した。「天よ、喜び祝え、地よ、喜び踊れ」という詩篇句で始まる書簡である。これを手に入れる条件をヨアンネスはこう満たした。

「平和のため、また、あらゆる躓きを取り除くため、コンスタンティノポリスのかつての司教ネストリオスを罷免された者とみなす。さらに、わたしたちの諸教会が正しく健全な信仰を持ち、聖下とまったく同じように、それを守り、その民に解き明かすように、ネストリオスの軽率な諸言行やむ

²²⁷ ACO I, 1, 4, p. 6:13-7:16.

²²⁸ ACO I, 1, 4, p. 9:22-14:20.

²²⁹ ACO I, 1, 7, p.154:4-40.

なしいお喋りを排斥する。わたしたちはコンスタンティノポリスの司教マクシミアノスの叙階に同意し、汚れなく真実な信仰を守り述べ伝える帝国のすべての司教たちとの交わりの中にいる。」²³⁰

ネストリオスの弾劾に関わる表現は極めてあいまいである。しかも、本人に責められ得る過ちが言行における注意の欠如に尽きる、ということも示唆されている。キュリロスが期待していた弾劾とは遠く離れていたに違いない。しかし皇帝の圧力もあって、それに甘んじるほかはなかったろう。いずれにせよ、二人の聖職者がヨアンネスに渡したキュリオスの書簡にはその後にも変化がなかった。

「諸教会の間に起きた食い違いが許しがたく、しっかりした根拠を欠いていたことは最も信心深い司教パウロスが今わたしたちのところに持参してきた説明資料から明らかである。その説明資料は欠点のない信仰定式を含んでおり、パウロスが確めてくださったように、その定式は聖下とそちらの最も信心深い司教たちによって作成された。一つずつの言葉にしたがって、それをわたしたちの書簡に織り込む。」²³¹

信条を補足説明と共にそのままを引用した後、キュリロスは帝国首都の単性論派に対して自分の見解を明確にする。彼らは「天に属する人」（一コリ15：49）をキーワードに、キリストの体が乙女マリアの子宮の中に形成されたのではなく、その中へ天から送られてきた、と言い、そのためキュリオスの権威を引き合いに出した。それに対する反論の中でキュリロスは先の信条の用語に微妙な訂正を加える。従来の議論を背景に「完全な神」と「完全な人」は二つの

²³⁰ ACO I, 1, 4, p. 9:11-14.

²³¹ ACO I, 1, 4, p. 16:21-26.

主体を想定させがちなので、キュリロスが信条の表現をこう訂正した。

「主イエス・キリストは神性において完全であり、人性においても完全であり、一つのプロソポンとして認められる。[二つの]本性の区別が無視されないものの、それらから言い尽くせない合一が達成された、とわたしたちは言う。」²³²

皇帝にキュリロスとの和解を伝える書簡の中、ヨアンネスはネストリオス以外は罷免された全司教の復帰を要請した²³³。ネストリオス個人を犠牲にすることを引き換えに、ネストリオスも弁護してきた教理を基礎に各地の教会を再び安定させよう、とする作戦に合致した要請であったのだろう。

4. 3. 合同の実施

433年4月12日、キュリロスは自分の管轄下ないし指導下の諸教会に合同の締結を知らせた。多少の反対に対応する必要もあったが、合同の実施に強く抵抗するような勢力はなかった。ところが、アンティオケイアの管轄下ないしは指導下にはいくつもの尊い伝統を誇る諸教区があったので、ヨアンネスの一言だけでは合同が実施されるような状態でなかった

とりわけ問題とされたのはキュリロスとネストリオスの扱いの違いであった。どちらもエフェソスでは競い合っていた一方の会議によって罷免・排斥されるまでは、同等の扱いであったが、ネストリオスには国家権力の代表によって出身修道院への帰還が許された一方で、皇帝の命令で監禁されていたキュリロスが自分の司教座に戻ることができたのは相当な賄賂のおかげだった。ところで、ヨアンネスが認めた合同の要は、ネストリオスだけが有罪となり、キュリロス

²³² ACO I, 1, 4, p. 18:25-19:1; COC 72:21-28.

²³³ ACO I, 1, 4, p. 128:2027.

は問題となっていた他の司教と同様に、アンティオケイアから送られた信条を受け入れたことだけで恩赦に浴した、ということであった。

こうした扱いの違いはどのように正当化されるのか。ヨアンネスの答えによれば、それまで主張してきたキリストの単一本性を明確に否認し、福音書や使徒の書簡における一部の発言がキリストの神的本性、一部が人間的本性に当てはまることに同意することでキュリロスは教理の面で十全たる譲歩をした²³⁴。しかし、ヨアンネスの要請に応じて、十二破門条項を論駁したテオドレトスは納得しなかった。アンティオケイアから送られた信条の受理による合同が真実なものであるならば、まさにその信条の中にまとめられているキリスト論を弁明してきたネストリオスも恩赦に浴するはずだ、との反論であった²³⁵。テオドレトスと一緒に十二破門条項の駁論を書いたサモサタの司教アンドレアス²³⁶をはじめ多くの司教は同様な反対を表明した。

とりわけ合同交渉の魂であったアカキオスと同様に100歳を超すヒエロポリスの司教アレクサンドロスの強い反対はヨアンネスにとって痛手であった。379年、アポリナリオスを排斥したアンティオケイア教会会議の決議を教皇ダマソスに伝え説明したのはアレクサンドロスであった。自ら高齢であるとはいえ、エフェソスでキュリロス側によって繰り広げられた主張の記憶が定かである、と力説したうえで、和解のために何がキュリロスに要請されたのかと問い質した。アポリナリオスの異端を否認することだけであったのではないか。その対価としてヨアンネスが得たのは、あまり拘束力のない信仰告白だけである。これに加えてキュリロスが十二破門条項を明快に撤回しない限り、彼との交わりに納得しかねる²³⁷。

思想面で一番鋭い反論はテュアナの司教エウテリオスから出た。彼によれば、

²³⁴ ACO I, 4, p.124:37-125:1.

²³⁵ ACO I, 4, p.125:26-32; 132:6-15.

²³⁶ ACO I, 4, p.127:16-21.

²³⁷ ACO I, 4, p.129:30-131:14; 133:22-134:6.

キュリロスはアンティオケイアから送られた信条を受け入れたうえで、その内容を従来の「ヒュポスタシスによる合一」という自分の考えに合わせて言い直した。まず、「キリスト」の代わりにもっぱら「言」について語り、とりわけ信条の「完全な神」と「完全な人」を「神性において完全であり、人性においても完全である」と告げることで、結局アポリナリオスと同じように両性からなる第三者を想定する。結局、キリストには一つの本性しかないということになる²³⁸。

各地で数回にわたって開かれた教会会議の結果、オリエンズ州の司教団はキュリロスとの交わりに賛成するものの、ネストリオスの罷免と排斥の承認に反対するテオドレトスのグループと、キュリロスの排斥にこだわり、ヨアンネスが結んだ妥協を全面的に拒否するアレクサンドロスのグループ、の二つに分かれた。

434年4月12日にマクシミアノスが亡くなり、不当にも罷免された前司教の復帰を求める声が上がる中、皇帝は速やかに常設司教会議にプロクロスを後任として選ばせた²³⁹。これを機にヨアンネスは自分の管轄下ないし指導下にある司教たちが合同に賛成するか、あるいは罷免・流罪に処されるかの二者択一を皇帝に提案した²⁴⁰。そしてコンスタンティノポリスではヨアンネスは自らがテオドレトスと会談した結果、彼も合同を支持するようになった。テオドレトスの支持で多くの司教が賛成に回ったが約15名が反対にこだわり、その中のアレクサンドロスはエジプトの鉱山での強制労働に処せられた²⁴¹。

ところが、以上の議論の各方面にネストリオスも積極的に参加していたので、やはりケレスティヌス1世がかつて要請したとおり、アンティオケイアから離れた流罪先への移転が避けられなくなった。最初の勅書でペトラが流罪先にな

²³⁸ ACO I, 4, p. 218:19 219:18.

²³⁹ ACO I, 4, p. 174:7-8.

²⁴⁰ ACO I, 4, p. 154:31-38.

²⁴¹ ACO I, 4, p. 203:26-204:20.

ったが²⁴²、訪問客が多かったので、ネストリオスはついにリビアの砂漠地帯の末端にあるイビス・オアシスに移された。一時的には遊牧民の侵略で自由になったこともあったが、最終的にテーベ地方が流罪先となった²⁴³。

5. 結び

論争の開始以来、分けてもエフェソス公会議の開会から閉会までは、キュリロスの動機も行動も卑しいものであったことは疑えない。しかし、カトリック神学の立場から、公会議の決議の有効性を判断するため二つの事柄を考慮しなければならない。一つは教皇ケレスティヌス1世の委任を受けてキュリロスが行動したことであり、もう一つは教皇使節が到着後直ちにキュリロスの主導で進められていた会議に加わり、改めてキュリロスに指導権を委任する教皇書簡を提出したことである。その結果、ヨアンネスの主導で進められていた会議ではなく、キュリロス主導の会議が教皇と結びついていた。実際に閉会后、ケレスティヌス1世の後を継いだシクストゥス3世によって正式に承認されたのはキュリロス主導の会議だけであった。これらに後代の公会議によるエフェソス公会議の継承が加わる。

ちょうど20年後にはカルケドンで開かれた公会議は「ローマのケレスティヌスとアレクサンドリアのキュリロスの權威でかつてエフェソスに開かれた聖なる教会会議の定めとすべての信仰定式を保持する」²⁴⁴と宣言した。さらに、553年6月2日、第二コンスタンティノポリス公会議の第八回総会で採択された規定第4条では、アポリナリオスとエウテュケスのように神的本性と人間的本性を混合する異端と共に、モプスエスティアのテオドロスとネストリオスのように両性を分割し、互いの関わり合いによる両性の一致しか認めない異端が退け

²⁴² ACO I, 1, 3, p. 67:11-28.

²⁴³ EVAGRIUS, *Historia Ecclesiastica* I, 7 (PG 86, 2437A-1444A).

²⁴⁴ ACO II, 1, 2, p. 127:1-4.

られる²⁴⁵。さらに規定第 14 条では、しかるべき手続きと調査なしにネストリオスを弾劾したことでエフェソス公会議を咎める者が排斥されている²⁴⁶。

この伝承を継承してエフェソス公会議 1500 周年を祝う回勅『真理の光』の中で教皇ピオ 11 世は 20 世紀初頭に発見されたネストリオスの文書に基づいてその正統性を弁明する研究者を厳しく戒めた。「ネストリオスが真に異端的な所見を述べ伝えたことを皆が確信するべきである」²⁴⁷、と。

しかしながら、なおかつ進められた研究結果の一つは 1994 年 11 月 11 日に行われた教皇ヨハネ・パウロ 2 世とキリスト教主流の世界ではネストリオス派教会の通称で知られている東方アッシリア教会のカトリコス総主教マル・ディンクハ 4 世の合同声明である²⁴⁸。両教会の「完全な交わり」を最終目標と掲げたうえで、ニカイア信条と 433 年の合同信条に沿って「受肉の秘義に関する合同信仰」を解き明かす。引き続いて、マリアの称号としては、東方アッシリア教会の「われらの神と救済者であるキリストの母」もカトリック教会の「神の母」も「同じ信仰の正当で真実の表現であることをわたしたち二人とも認める」²⁴⁹。そして「完全な交わり」に向かう課題を取り上げる前に、二人の指導者は歴史をこう振り返る。

「過去の諸論争は、個々人と諸定式に関わる排斥へと導いた。このようにしてもたらされた諸分裂が大部分において誤解に起因するものであったことをよりよく理解することを、今日、主の霊はわたしたちに許して下さい。」²⁵⁰

エフェソス公会議が自ら作成した文書はネストリオスとヨアンネスの罷免・

²⁴⁵ Mansi 9, 377C-D; COD 115:28-38.

²⁴⁶ Mansi 9, 388A; COD 121:39-42.

²⁴⁷ AAS 23 (1931) 505.

²⁴⁸ AAS 87 (1995) 685-687.

²⁴⁹ Ibid. 686.

²⁵⁰ Ibid.

排斥を宣言する文書だけである。ネストリオスの罷免・排斥のために挙げられた理由は、「不敬度に述べた」ことだけである。公会議はさらにキュリオスのネストリオスに宛てた第二の書簡について、ニカイア信条と一致していること、それに答えたネストリオスの第二の書簡については、ニカイア信条と一致していない、と投票で決議した。つまり、教理としてはニカイア信条だけが再確認されたが、キュリオスの第二の書簡は公会議の公式な見解として教理に近い性格を有する。実際、この文書はカルケドン公会議の教理決議に大きな影響があった。しかし433年の合同信条もカルケドン公会議にキュリオスの書簡に劣らない影響を及ぼしたことに留意したい。

キュリオスのキーワードであった「ヒュポスタシスによる合一」は、エフェソス公会議当時には「本性における合一」という意味においても通用していた。合同信条及びその補足説明で力説されている両性の区別が承認された後には、はじめてキリストにおける「合一」の基礎が「本性」なるものうちにはなく、かけがえのない「個」のうちに求められるべきである、という合意形成への道が開かれた。